

長岡京市文化財調査報告書

第 18 冊

1987

長岡京市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 18 冊

1987

長岡京市教育委員会

序 文

文化財とは、先人が文化の発達に役立つため残した遺産であり、先人から現代人に贈られた貴重な国民共有の財産であります。

この文化財を永く保存し、後世に伝えるとともに、現代社会において広く活用を図ることは、私たち現代人に課せられた重要な使命であります。

特に埋蔵文化財については、文字や文献の乏しい時代の文化を解明するための唯一の歴史的資料であるとともに、地下に刻まれた遺構等については、一旦、破壊されると二度と戻らない資料であります。

申すまでもなく、埋蔵文化財は現状保存が理想であります。土地利用等から現状保存が不可能な場合は、発掘調査において、正確な記録と資料の作成をする必要があります。

本市では昭和30年以降、急速に都市化が進み、それに伴う開発行為により多くの遺跡が破壊の危機に瀕し、多くの貴重な文化財が失われつつありました。そこで、この様な事態に対処すべく、昭和53年度には埋蔵文化財専門担当職員を配するとともに、昭和57年7月には財團法人長岡京市埋蔵文化財センターを設立し、調査体制の充実に努めてまいりました。また、昭和59年度には埋蔵文化財の中核施設として長岡京市立埋蔵文化財調査センターを建設し、昭和60年度に開所する等埋蔵文化財保護のため積極的に施策を推進してまいりました。

ここに刊行いたします報告書は、昭和61年度中に教育委員会が直営で実施しました国庫補助事業の成果をまとめたもので、その主な内容といしまして、弥生時代の環濠集落と判明した長法寺遺跡、奈良時代の寺院である乙訓寺の寺域、長岡京右京三条第二小路南側溝等に関するものであります。これらの調査成果は本市の歴史を解明する上で貴重な資料になるとともに、市民の学習資料として広く活用していただけると期待いたします。

最後に、調査実施にあたって種々ご指導をいただいた諸先生方ならびに関係行政機関、また発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々に、紙上をお借りし、厚くお礼申しあげます。

昭和62年3月

長岡京市教育委員会

教育長 湯 浅 成 治

凡 例

1. 本冊は、昭和61年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡の発掘調査の概要報告である。
2. 上記の調査地は付表一のとおりである。その位置は第1図に示した。
3. 長岡京跡の調査の次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、高橋美久二「長岡宮跡昭和51年度発掘調査概要」(京都府教育委員会「埋蔵文化財発掘調査概報(1977)」昭和52年)による小字名をもとにした地区割に従った。
4. 長岡京内の条坊名は、山中章他「第126図長岡京条坊図」(向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 1982年)による呼称に従った。
5. 各調査報告の執筆者は、各章のはじめに記した。
6. 本書の編集は長岡京市教育委員会管理課文化財係 中尾秀正が担当した。
7. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々の御協力を得た。

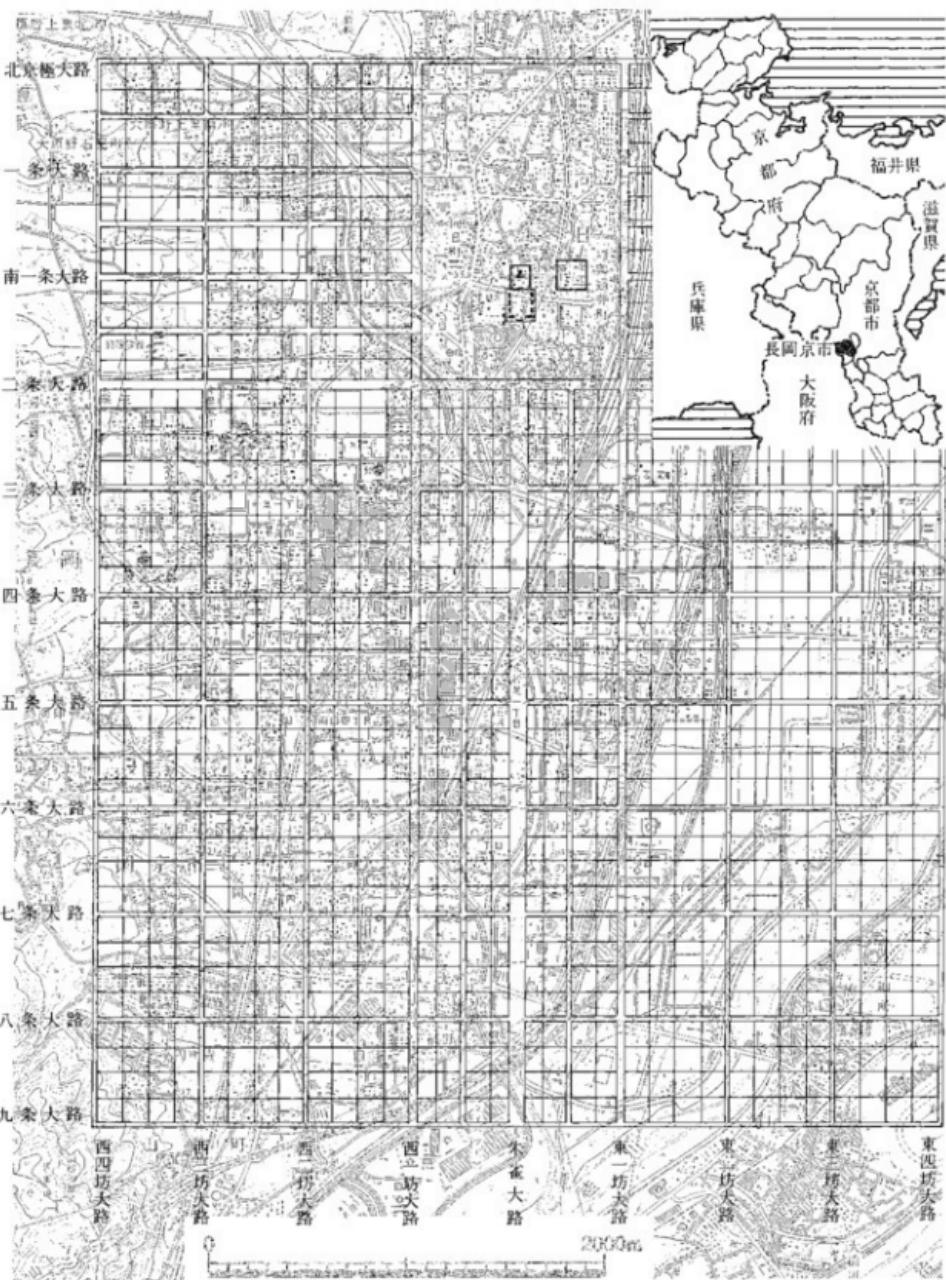
〔調査作業員〕 麻田安太郎・天野菊次郎・井本千代治・池末安秀・岩岸三郎・佐藤昭三
田中寅吉・中村正雄・廣沢勝己

〔調査補助員・整理員〕

青木也寸志・赤木 恵・岩川絢子・占部真里・小田昌子・奥田泰江・桂光良・木村弘子・倉橋裕之・小畠絢子・鈴木英美子・田中佐知子・田中智紀・花村 漣・前田明美・渡辺美智代

付表一 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間(現地)	調査面積	備考
長岡京跡 右京第228次調査	7ANJMM	長岡京市長法寺 南野20-1他	金剛住宅㈱	1986 4.21~5.13	約300㎡	長法寺遺跡第1次調査 今回は弥生時代を除く報告
長岡京跡 右京第232次調査	7ANIKU-3	長岡京市今里五 丁目14-1他	能勢 久嗣	1986 6.3~8.5	約175㎡	今回は遺構編の報告
長岡京跡 右京第249次調査	7ANINE-4	長岡京市野添一 丁目47-5他	大成ハウス㈱	1986 11.25~12.24	約125㎡	



第1図 本書報告調査位置図

本文目次

序.....			
凡例.....			
第1章 長岡京跡右京第 228 次調査概要(1).....	1		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第2章 長岡京跡右京第 232 次調査概要(1).....	11		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 まとめ
第3章 長岡京跡右京第 249 次調査概要.....	25		
1 はじめに	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			

図版目次

長岡京跡右京第228次（7ANJMM地区）調査

- 図版 1 (1) 拡張前の調査地全景（北から） (2) 調査地全景（北から）
図版 2 (1) 堀立柱建物SB22802・SB22806（北から） (2) 堀立柱建物SB22803
(北から)

長岡京跡右京第232次（7ANI KU-3地区）調査

- 図版 3 (1) Bトレンチ第2層上面検出遺構（南から） (2) Bトレンチ第4層上面検出遺構（南から）
図版 4 (1) Bトレンチ第6層上層上面検出遺構（南から） (2) Bトレンチ第6層下層上面検出遺構（南から）
図版 5 (1) Bトレンチ第6層下層上面検出遺構（北から） (2) Bトレンチ第6層下層上面検出遺構（北から）
図版 6 (1) Bトレンチ地山上面検出遺構（北から） (2) Bトレンチ地山上面検出遺構（南部、北から）
図版 7 (1) 柱穴P1（南から） (2) 火舍出土状況 (3) 溝SD23204東壁断面
(4) 溝SD23205西壁断面
図版 8 (1) 土壌SK23212（南から） (2) 土壌SK23212廻出土状況
(3) 柱穴P13 (4) 柱穴P14

長岡京跡右京第249次（7ANINE-4地区）調査

- 図版 9 (1) 上層遺構全景（北から） (2) 上層遺構全景（東から）
図版 10 (1) 溝SD24901（東から） (2) 溝SD24901の土層（上=東端、下=西端）
(3) 溝SD24901遺物出土状況
図版 11 (1) 堀立柱建物SB24902・SB24903（東から） (2) 堀立柱建物の柱掘形
図版 12 (1) 下層遺構全景（北から） (2) 下層遺構全景（南から）
図版 13 (1) 流路SD24905・SD24907・SD24908（東から）
(2) 流路SD24905土層堆積状況（北から） (3) 流路SD24905遺物出土状況（南から）
(4) 流路SD24906（南から）
図版 14 出土遺物(1)

図版 15 出土遺物(2)

図版 16 出土遺物(3)

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査位置図 II

長岡京跡右京第228次（7ANJMM地区）調査

第2図	発掘調査地位置図	1
第3図	トレンチ北壁土層図	2
第4図	検出遺構図	3
第5図	掘立柱建物S B 22802・22806実測図	5
第6図	掘立柱建物S B 22803実測図	6
第7図	掘立柱建物S B 22820実測図	7
第8図	出土遺物実測図	8
第9図	調査地遠景	9
第10図	S B 22802・Pit 38遺物出土状況	9

長岡京跡右京第232次（7ANIKU-3地区）調査

第11図	発掘調査地位置図	11
第12図	調査地周辺図	12
第13図	調査前風景（南西から）	13
第14図	Aトレンチ南壁断面	13
第15図	Aトレンチ土層図	14
第16図	Bトレンチ検出遺構図	15
第17図	Bトレンチ土層図	17
第18図	Bトレンチ柱穴P1・P13・P14実測図	20
第19図	周辺地形と乙訓寺	23

長岡京跡右京第249次（7ANINE-4地区）調査

第20図	発掘調査地位置図	25
第21図	発掘作業風景	26
第22図	発掘区概念図	26

第23図	検出造構配置図	27
第24図	第2トレンチ西壁土層図	29
第25図	溝S D 24901実測図	30
第26図	溝S D 24901土層図	31
第27図	掘立柱建物S B 24902実測図	31
第28図	掘立柱建物S B 24903実測図	31
第29図	流路S D 24905土層図	32
第30図	溝S D 24901出土土器実測図	36
第31図	溝S D 24901出土須恵器実測図	37
第32図	掘立柱建物S B 24903出土土器実測図	39
第33図	墨書き土器実測図	40
第34図	黒色・製塙土器、土製品実測図	41
第35図	軒丸瓦実測図	42
第36図	木製品実測図	43
第37図	長岡京期以前の土器実測図	43
第38図	条坊造構概念図	44

付 表 目 次

付表-1	本書報告調査一覧表	II
付表-2	造構座標表	30
付表-3	溝S D 24901出土土器集計表	34
付表-4	墨書き土器一覧表	41
付表-5	溝S D 24901出土土器観察表	48・49

第1章 長岡京跡右京第228次（7ANJMM地区）調査概要（1）

——右京四条四坊十一町・長法寺遺跡——

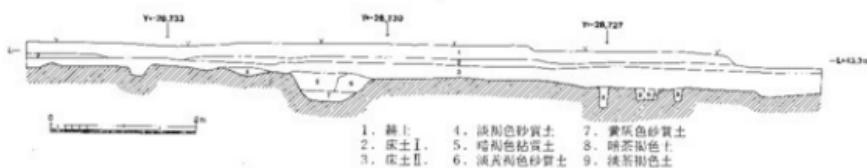
1 はじめに

- 1 本報告は1986年4月21日から5月13日まで、長岡市長法寺南野20-1他において実施した長岡京跡右京四条四坊十一町推定地における発掘調査に関するものである。
- 2 この調査によって新たに弥生時代・奈良時代の遺構が発見され、長法寺遺跡と命名された。本報告はこれらのうち、弥生時代を除く時期の概要報告である。
- 3 本調査は、宅地造成に伴い実施した調査で、調査面積は最終的に300m²となった。
- 4 現地調査および整理作業は長岡市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。調査員は(財)長岡市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。
- 5 調査実施にあたり、土地所有者である金剛住宅株式会社には数々の御協力を得た。また調査中には京都文教短期大学教授中山修一氏、大阪大学助教授都出比呂志氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所牛嶋茂氏等には多くの御指導・御協力を得た。
- 6 調査後の遺構図面の整理・遺物の実測等は占部真里が主に行い、編集・執筆は小田桐が行った。なお弥生時代の成果については、次年度に報告の予定である。
(1)



第2図 発掘調査位置図 (1 / 5000)

2 調査経過



第3図 トレンチ北壁上層図 (1/80)

2 調査経過

調査地は西山丘陵を東へ降りてすぐの扇状地で、現在は西から東へ向かって段々に低くなる耕作地となっている。ここに宅地開発の計画が起り、3月27日より原因者負担により試掘調査を開始した。当地は、長岡京内において都の西限に近い右京四条四坊十一町に想定されているが、これまで調査が実施されておらず他時期に関しては全く判明していなかった。

試掘調査によって、後述する土壤S K 22801と調査対象地南側に落ち込む遺構（後の環濠S D 22808）、掘立柱建物の一角が検出され、長岡京期以前の遺跡が存在することが明らかとなった。そこで市教育委員会ではこの遺跡の重要性に鑑み、国庫補助事業として調査を続行した。

調査地の基本層序は、現在の水田に伴う耕作土・床土層の下に灰褐色粘質土（第3図 床土Ⅱ）の堆積が認められた。この層はトレンチ南端部では認められず、西から東、南から北へ向かって若干深くなっている。この灰褐色粘質土層には土師器片、須恵器片、弥生土器片が含まれているが、中に中・近世の陶磁器類も含んでおり、小片化していることからこの層も水田耕作に伴う床土層と考えられる。この層を除去すると赤灰色～黄灰色を呈する砂質土の面となり、この層をベースとして遺構が検出された。

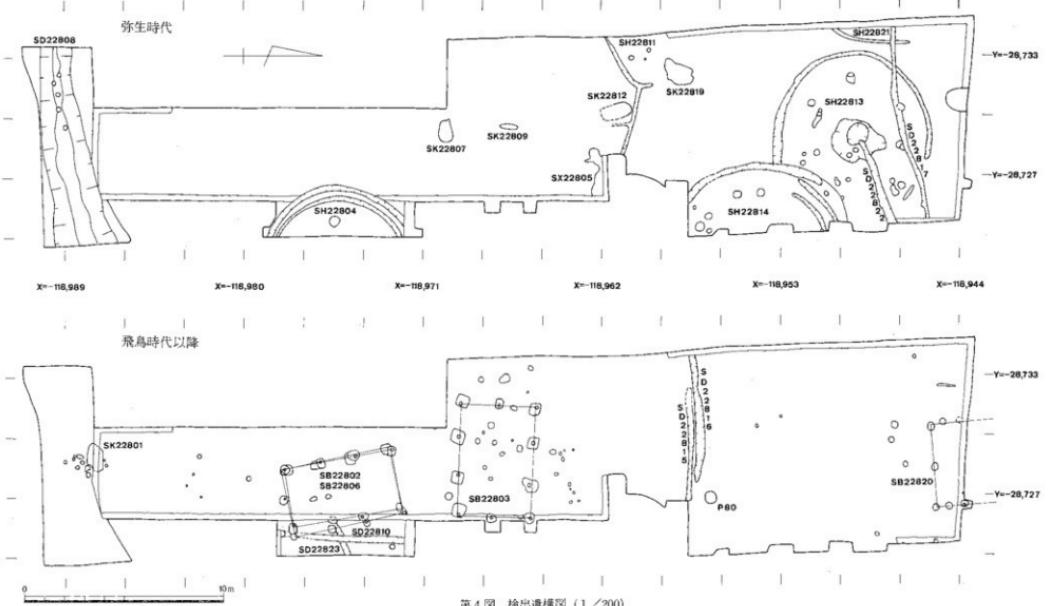
主な検出遺構は掘立柱建物3棟、竪穴住居1基、溝、土壙などであり、これらの全容を追求すべく、適宜拡張を行った。またトレンチをさらに北側の一段低くなっている水田区画にも拡張し、ここでも掘立柱建物1棟、竪穴住居4基、土壙などを検出した。

ここで明らかになった遺跡は弥生時代の竪穴住居群と大溝、土壙等を含む集落址（環濠集落になるとされる）と飛鳥・奈良時代の掘立柱建物群と土壙である。これら多時期にわたる遺跡は当調査で初めて明らかになったものであり、「長法寺遺跡」と命名して市民への周知を図ることにした。

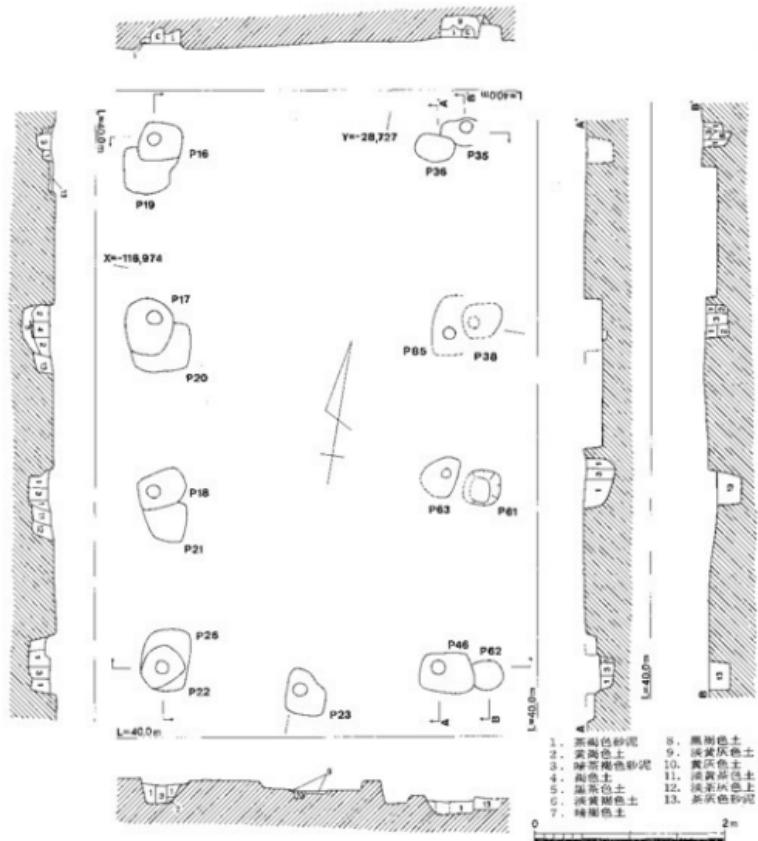
なお今回の報告は弥生時代を除く他時期に限り、弥生時代集落に関しては整理の終了を待つて次年度に報告する。

3 検出遺構

掘立柱建物 S B 22802 (P19・P20・P21・P22・P62・P61・P38・P35) 全容が検出



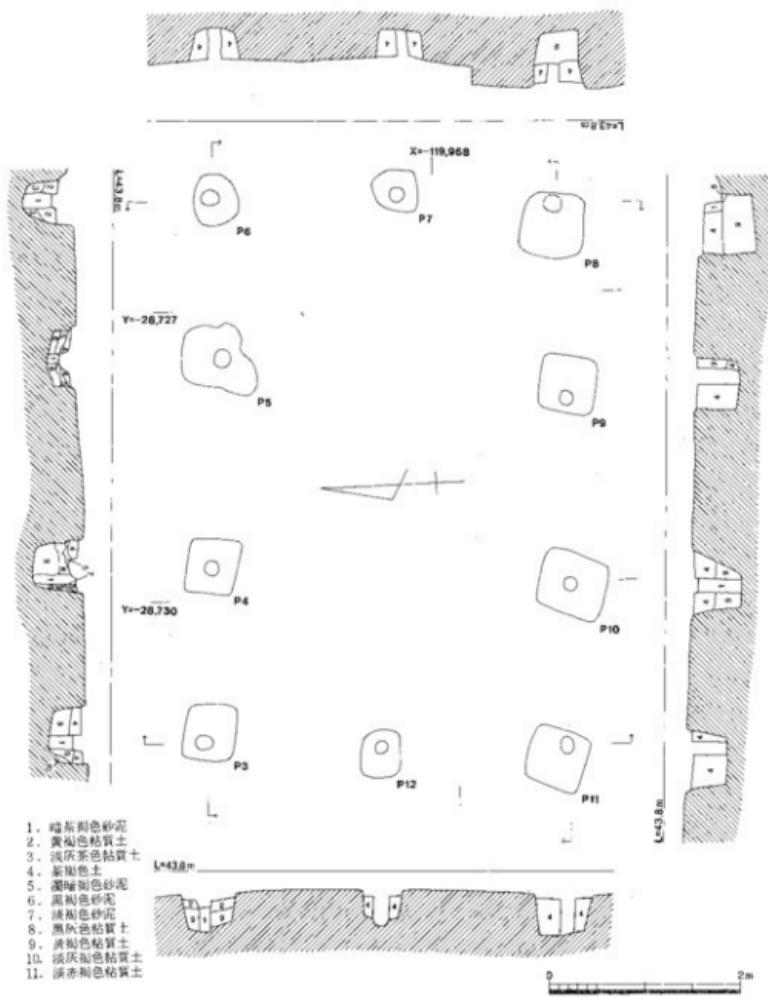
第4図 検出遺構図 (1/200)



第5図 掘立柱建物 S B 22802・22806実測図 (1/60)

されていないため詳細は不明であったが、桁行5.5m、梁間3.3mの南北棟で棟方向は北で西に12振れている2間×3間の掘立柱建物になると考えられる。柱掘形は大きさ・形状にバラツキがあるが、0.4~0.6mの規模を有する。柱の深さは深いものでも0.3m、浅いものでは0.05mほどしかなく、梁間中央部の柱は検出されなかった。なおP38はちょうど中央部を調査開始当初掘った排水用の溝がかかり確認できなかったが、後述するS B 22806の柱穴と切り合っていたと考えられる。

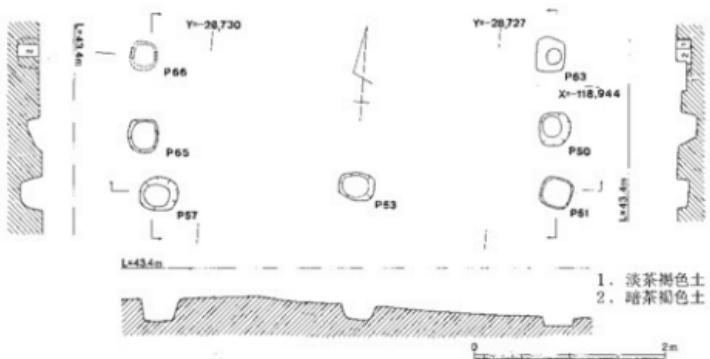
掘立柱建物 S B 22806(P16・P17・P18・P26・P23・P46・P63・P85・P36) S B 22802と重なって建てられている建物で、西側柱列が完全に重複していることからS B 22802が建て換えたものと考えられる。桁行は西列が1.8m等間、東列は1.4~1.9mとバラツキがある。



第6図 掘立柱建物S B 22803実測図(1/60)

梁間1.5m等間であるが、北列中央の柱穴は検出できなかった。棟方向は北で西に10°振れる2間×3間の南北棟である。柱掘形はほぼ0.4m×0.5mの隅丸方形を呈しており、0.3mほど深さで残存していた。中でもP17の柱根下部には甕と鍋が埋納されていたような状況で検出されている。

掘立柱建物S B 22803 2間×3間の東西棟で棟方向は東で南に3°ほど振れている。柱間



第7図 掘立柱建物SB 22820実測図(1/60)

は桁行で1間1.65m～2.2m、梁間では1.65m～1.95mとバラツキがある。柱掘形はしっかりした隅丸方形で規模は1辺0.6m四方のものがほとんどである。0.3m～0.6mの深さで残存していた。

掘立柱建物SB 22820 調査トレンチの北端部で検出された建物で、東西2間×南北1間以上の南北棟になると考えられる。棟方向は北で西に4°ほど振れる。柱間は東西2.1m等間、南北1.4mを測るが、P50・P65がこのほぼ中間に位置し、これらのピットもこの建物に関係する可能性も考えられるが、そうすると南北0.7m等間となり、異常に短いものとなるため、現段階ではこれらのピットは保留しておく。柱掘形は1辺0.4m弱と小型の隅丸方形を呈している。

土壌SK 22801 長辺1.4m・短辺0.8mの楕円形を呈し、深さ0.14mほど皿状に凹む土壌である。埋土は茶褐色砂質土の單一層である。

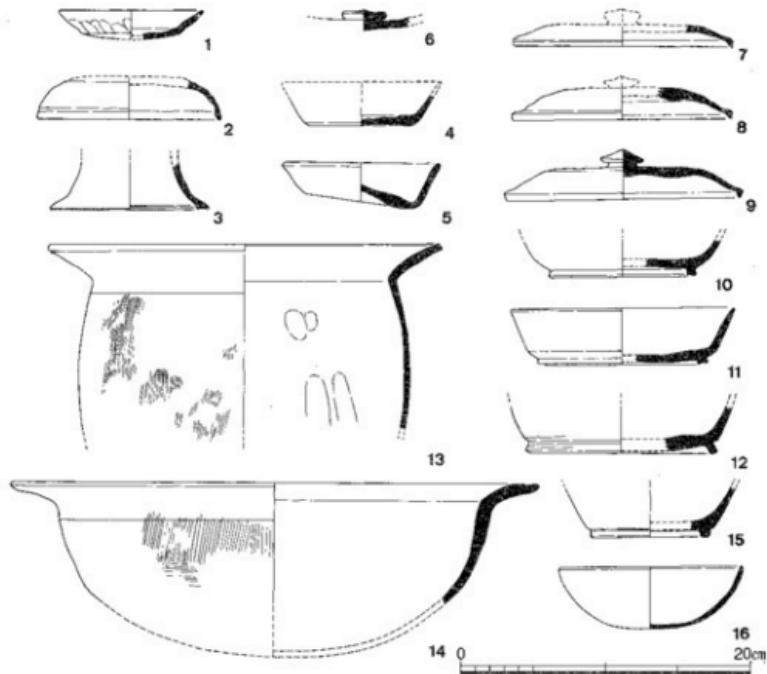
その他の遺構 溝SD 22815・SD 22816・SD 22810・SD 22823はいずれも灰褐色粘質土層を切り込んで掘られている溝で、中・近世以降の水田耕作に伴うものと考えられる。

4 出土遺物

今回報告する遺物は弥生時代を除いたものである。弥生時代遺物は全ての包含層や遺構に混入しているが、細片が多く摩耗しているため実測可能な個体は少ない。対象となる遺物の量は遺構の性格からか少なく、コンテナ2箱ほどである。なお第8図は図示し得る破片のほとんどである。

耕作土・床土Iからはあまり出土しなかったが、2の須恵器蓋、4の須恵器杯Aが出土した。灰褐色粘質土層からは比較的多く出土したが破片や細片がほとんどである。中には瓦器片や染付けを含む陶器片や磁器片も若干混入しているが弥生土器の量が圧倒的に多く、下から攪拌されたものと考えられる。1は土師器皿で、黄灰色を呈し胎土に赤色粒子を含む。外面は口縁

8 出土遺物



第8図 出土遺物実測図 (1/4)

端部のみ横方向になで、他の部分には成形の痕跡を留めている。内面には底面と口縁部の境に沈線が巡る。3は長脚の高环になると考えられる須恵器である。端部下面に凹面をつくるタイプで類例は陶邑古窯址群T K74号窯にみられる。⁽²⁾ 6～8は須恵器環蓋で、いずれもS B22802・S B22806の上層での出土である。10も同地区で出土した須恵器環Bである。

S B22802では9と11がP38から出土した。9の環蓋は水平な天井部からならかなカーブで端部に至るもので、内面には部分的にすられた痕跡があり、硯として転用された可能性を考えられる。灰褐色粘質土層出土の破片とP35出土の破片が本個体と接合した。

S B22806からは、P18から12の須恵器環B、P17からは13の土師器甕、14の土師器鍋が出土した。13は口縁は直線的に開き、端部に四角い面をつくる。体部はゆるやかにふくらみ、縱方向のハケによって調整される。内外面共摩耗が著しい。黄灰色を呈し、胎土に石英・長石・チャート類の石粒を含む。14は13といっしょに柱あたり下面につぶされていたもので、口縁は外反ぎみに延び、端部は丸くおさめる。端部内面は少し肥厚する。体部は縱方向と横方向のハケで調整され、頭部は横に強くなっている。胎土は13と類似した特徴をもつ。13は外面にのみ煤が付着しているが、14は内外面共に火を受けた痕跡を有する。両者共半個体ほどの破

片数が出土している。

S B22803からは小片である
が15の須恵器环BがP10から出
土している。

S K22801からは5の須恵器
环Aが出土した。焼け歪んでい
るが、底部と口縁部との境は丸
みをもち、底部外面はロクロか
らヘラ起こしされたまま未調整
である。器壁は厚手で端部もぼ
つりしている。

16はP80から出土した土師器
碗Aである。内外面は著しく摩
耗しているが、かすかに外面へ
ラ削りの痕跡が認められる。明
茶灰色を呈し、胎土には長石の
微粒子や金雲母を多く含む。

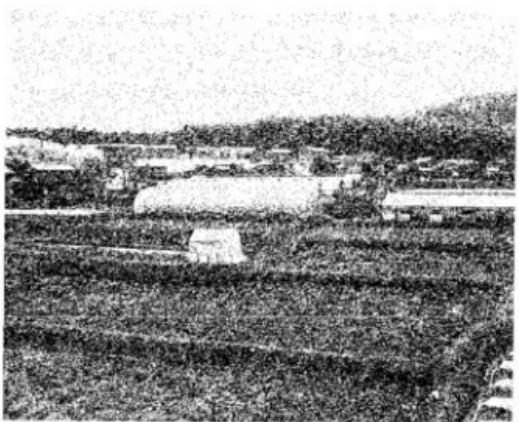
なお試掘調査の段階でサヌカ
イト剝片が1点出土している。

5 ま と め

今回の調査によって確認され
た長法寺遺跡であるが、ここで
は弥生時代以降について簡単に
まとめておきたい。

灰褐色粘質土層から出土している遺物で、時期の古いところでは2の須恵器蓋があげられる。
同様の蓋の破片は他にも2~3点出土しており、6世紀末葉の時期の遺構も存在する可能性が
考えられる。検出遺構で最古のものとしてはS K22801があげられる。この土壤は5の环以外に
は土師器片が若干出土しており、小型の甌になる。この甌は頸部があまり縮らず、ゆるやかに
口縁部から体部に移行するものである。これらの資料からこの土壤は7世紀前半代頃におさえ
られよう。この周辺部では返りを有する須恵器环蓋片も出土している。

掘立柱建物はいずれも方位を異にしており、さらに個々の建物の柱掘形の形状や規模、柱間



第9図 調査地遠景（東から）



第10図 S B22802 · P i t 38出土状況

寸法の相異などを考慮すると、それぞれ時期差をもった建物であると考えられる。中でも S B 22802 と S B 22806 は柱穴どうしの切り合いから新旧関係が明らかである。古段階の建物 S B 22802 は柱穴から出土している環と蓋から 8 世紀前半から中頃に位置付けられる。新段階の建物 S B 22806 も環の形態や壺の形態から推して 8 世紀後半に入るものであろう。壺の形態はまだ類例が少なく、今後の検討を要する。

S B 22803 では 15 の环片が唯一年代を推定する根据となるものである。この土器はかなり長岡京期に近いタイプであるが、まだ高台が四角くしっかりとしており、この資料のみでは時期を決し得ない。S B 22803 は東で南に 3°ほど振れていると前述したが、南柱列だけはほぼ真東西に並んでおり、長岡京期の建物である可能性も考えられる。

S B 22820 は他の建物と比較して柱掘形の規模がだいぶ小さいが、まだ隅丸方形を保っており、また掘形埋土も似通っていることから他の建物同様奈良時代に含まれる可能性も否定できない。

S B 22803・S B 22820 の時期についてさらに検討を加えると、これらの建物が検出された上層にあたる灰褐色粘質土層中の遺物で、長岡京期から平安・中世にかけてのものは非常に少なく、奈良時代とそれ以前のものにはぼ限られている。本調査地の北東約 500m の今里西ノ口における調査では奈良時代の建物が多数検出されているが、中でも振れ角が北で西に 4°~12° 振れる建物は 8 世紀後半に限られており、9 世紀の建物群の振れとは明確に区別されている。また奈良時代集落を検討している中尾秀正氏の論証によると、乙訓地方の奈良時代建物はおむね北で西に振れるものが多く、これは地形に沿ったものとして理解されている。これが長岡京期に近づくにつれて真北に近くなる傾向にあり、正方位を向く建物も存在している。⁽⁴⁾

このような傾向と本調査の様相から考えて、今回検出の 4 株は全て奈良時代での変遷と理解しておきたい。また転用窓の出土から識字階級の存在が想定され、ここに居住した豪族の性格を考える上で一資料となった。今後の辺境部での調査に期待がかけられる。

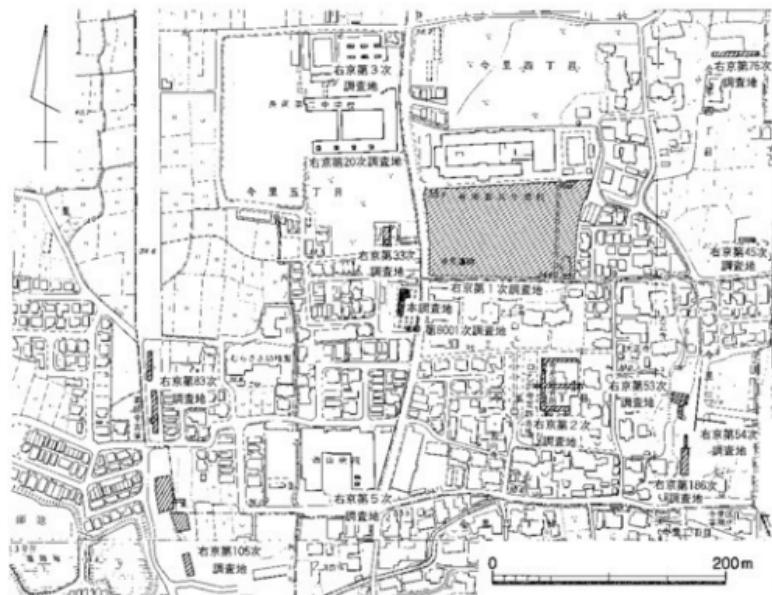
- 1) なお、(財)長岡京市埋蔵文化財センター 奥村暁美氏のご協力を得た。
- 2) 「陶邑V・大阪府文化財調査報告書 第23冊」(財)大阪文化財センター 1980年
- 3) 山口博徳「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報 第9冊』1984年
- 4) 中尾秀正「乙訓地方における奈良時代集落の検討」中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』1986年

第2章 長岡京跡右京第232次(7ANIKU-3地区)調査概要(1)

—右京三条三坊十町・乙訓寺・今里遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、1986年6月3日から8月5日まで、長岡京市今里五丁目14-1他において実施した長岡京跡右京三条三坊十町推定地および乙訓寺・今里遺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は約175m²である。
- 2 本調査は重要遺跡確認調査の一つとして、長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡京市教育委員会文化財係中尾秀正が担当した。
(1)
- 3 調査後の遺構図面の整理・遺物の分類・実測・製図は、中尾・占部真里が主に行った。
- 4 調査実施にあたり、土地所有者である能勢久嗣氏をはじめ、能勢晃次氏ほか近隣住民のご協力を得た。また調査中には、京都文教短期大学教授中山修一氏、財團法人長岡京市埋蔵文化財センター等からご指導、ご援助を賜った。
- 5 本報告の編集・執筆は中尾が行った。なお、出土遺物に関しては多量に出土したため次回の報告に譲った。

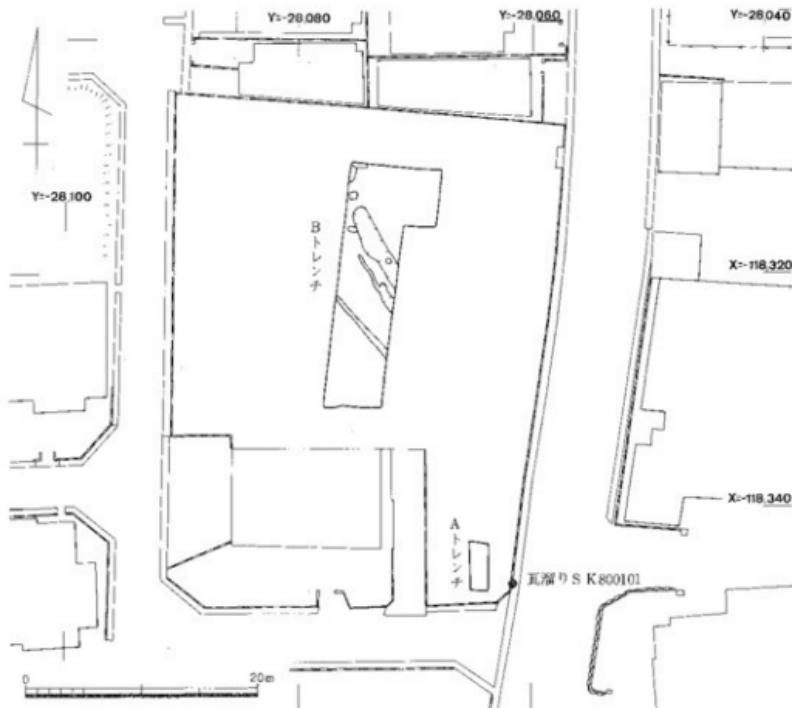


第11図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

当調査地は、長岡京市北部の今里地区にある乙訓寺の西約50mの地点で、標高約35mの洪積段丘に位置し、北西から南東に緩やかに傾斜している。当地はかつて竹藪であったが、現在開墾され畠となり、周囲を宅地によって取り囲まれている。

当地は、長岡京条坊復原図によると右京三条三坊十町にあたり、乙訓寺の推定寺域の西辺に位置する。また、縄文時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡である今里遺跡の範囲にある。⁽²⁾ とくに、郡名を冠する乙訓寺は奈良時代前期に創建された古刹で、元禄年間に再興された伽藍を今日に伝えている。当寺が文献史料にみえるのは、『日本紀略』延暦4年9月の条で造長岡宮使藤原種継の暗殺に連座した早良親王が幽閉された記事で、往時の伽藍の一部が昭和41⁽³⁾ 年の長岡第三小学校建設時の長岡京跡右京第1次発掘調査などで確認され、伽藍の規模・構造、⁽⁴⁾ 寺域の検討がなされている。それによると、講堂およびその両端に取付く回廊によって北辺を



第12図 調査地周辺図 (1/500)

画する主要伽藍がほぼ1町四方で、少なくとも長岡京期には東西3町・南北2町の寺域をもっていたと推定されている。

今回の調査は、上述の遺跡に関する遺構、とくに乙訓寺寺域西辺を画する何らかの遺構が検出されることを期待し、実施した。

調査は、まず土層の堆積状況を把握するために敷地北部1ヶ所と南部2ヶ所に試掘穴を設定することから始めた。北部では地表下0.5mで褐色土の地山面が確認されたにもかかわらず、南部では地表下2m以上掘下げてもまだ地山面が確認できなかった。日下雅義氏作図の地形図などを参考に検討を加えてみると、どうも調査地の南部に北西から南東に向かう谷があったのではないかと想定させられた。このことを考慮して、調査トレンチを2ヶ所に設定した。敷地南東端で瓦溜りS K800101のすぐ西側に隣接する所に東西1.5m×南北2m（のち2m延長）のAトレンチを、敷地中央に幅5mで、東西8m、南北21mのL字型のBトレンチをそれぞれ設定した。⁽⁵⁾

⁽⁶⁾ 調査はいずれのトレンチもすべて人力で作業を行った。調査途中、7月20日の集中豪雨によるBトレンチ南部壁面の崩壊や、湧水で悩まされるなどの障害もあった。調査の結果、北から南東に流れる旧河道を確認し、その中から弥生時代後期～平安時代の遺物が出土した。ただ調査では、旧河道左岸の一部が検出されたのみで、その規模については明らかにできなかった。

調査後、すべて人力によって旧状に復した。

3 検出遺構

調査地の基本層位は、北部と南部で大きく異なっている。北部では、耕作土・竹藪の客土の直下で褐色土の地山面となり、地表下約0.5mを測る。南部では、耕作土と地山との間に竹藪の



第13図 調査前風景（南西から）

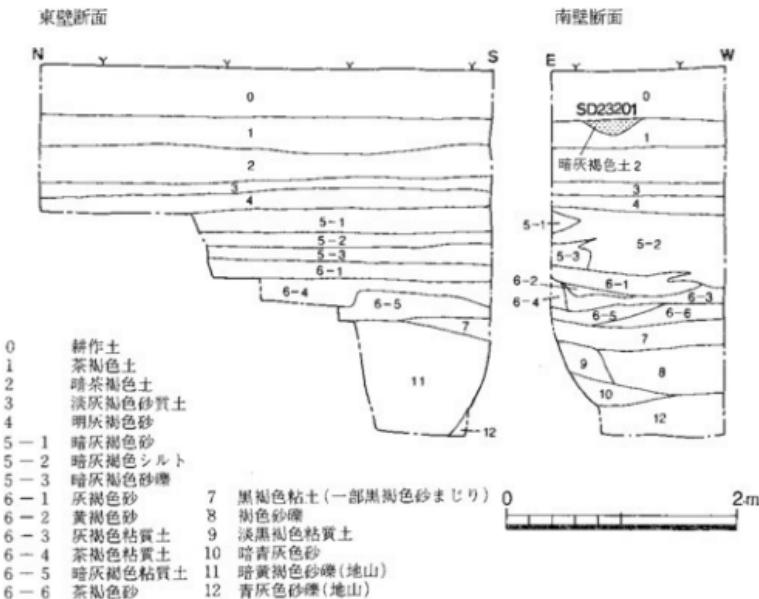


第14図 Aトレンチ南壁断面

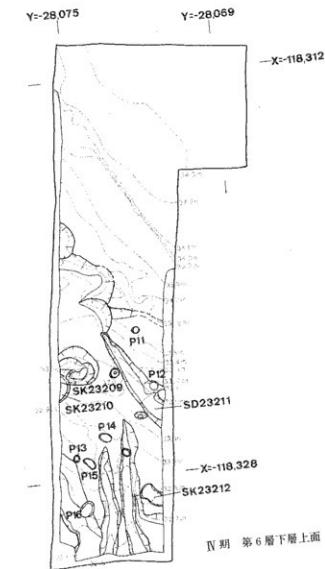
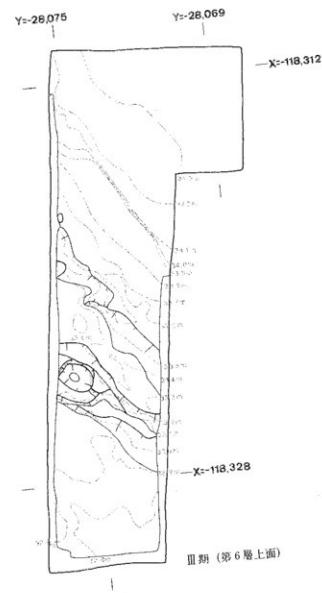
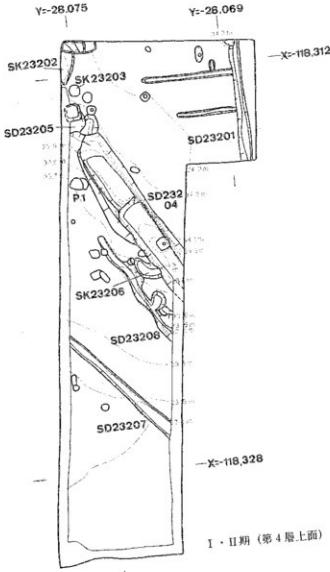
客土や砂・砂礫・粘土など旧河道に堆積した土砂があり、地表下2.5~2.8mで青灰色・灰褐色砂礫の地山面に至る。地山面は北部と南部で2m余りの高低差をもち、中央部で南へ急激に落ち込む地形を呈している。

A トレンチ (第12・14・15図)

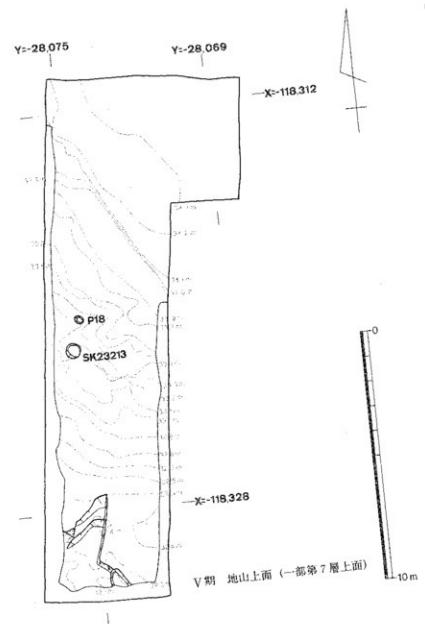
層位は第15図のとおり12層に分けられるが、堆積状況により次のとおり分けられる。厚さ約0.45mの耕作土の下に茶褐色土（第1層）・暗茶褐色土（第2層）・淡灰褐色砂質土（第3層）が厚さ0.6mで水平堆積している。その下に約1mの厚さで暗灰褐色砂（第4層）および粘質土・シルト・砂・砂礫が交互に堆積した第5・6層がある。さらに黒褐色粘土（第7層）・褐色砂礫（第8層）・淡黒褐色粘質土（第9層）・暗青灰色砂（第10層）が厚さ0.6m堆積し、地表下2.1~3.2mで暗黄褐色または青灰色砂礫（第11・12層）の地山面となる。地山面は北東から南西方向にやや傾斜をもって落ち込む。このような堆積状況から、第4層から第10層までが河川による堆積で、かつて当地に旧河道が存在していたことが判明した。この河道からは平安時代初期以前の土師器・須恵器・瓦や弥生土器などが出土している。また、第2・3層からは瓦器とともに平安時代初以前の土師器・須恵器・瓦や弥生土器が大量に出土していることから、中世までに旧河道が廃絶されたと考えられる。

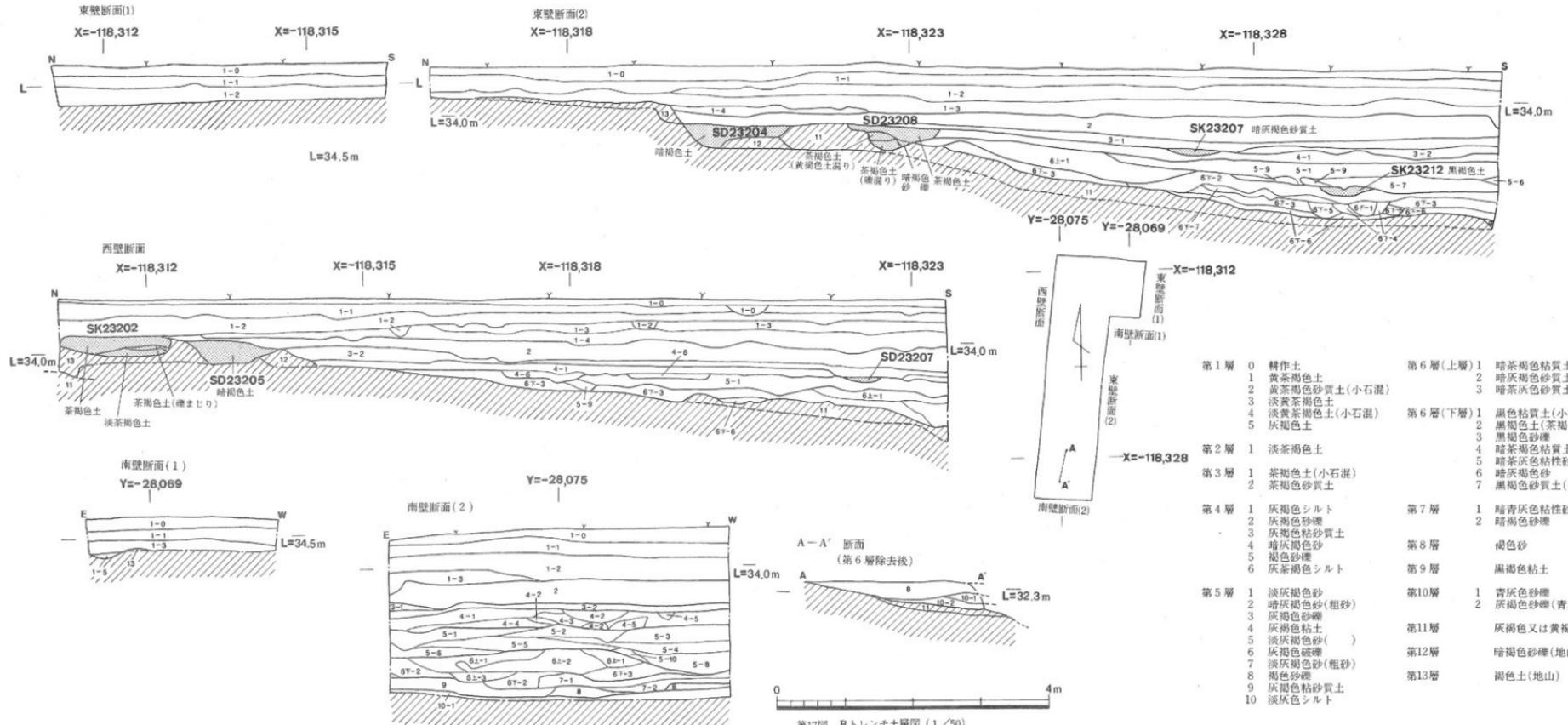


第15図 A トレンチ土層図 (1/50)



第16図 Bトレンチ検出遺構図 (1/150)





検出された遺構は、第2層上面で検出された溝1条である。この溝はトレンチ中央や東寄りで検出され、幅0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐褐色土で、土師器・須恵器・近世陶器・平瓦が出土した。なお、当トレンチのすぐ東側で検出された瓦溜りSK800101に関連するような遺構は確認されなかった。

B トレンチ（第12・13・16～18図、図版3～8）

層位は前述のとおり北部と南部で大きく異なり、地山面は、トレンチ中央部やや北寄りで急に落ち込み、南西方向に緩やかに下降する。トレンチ南半部の土層堆積状況はAトレンチとほぼ同様である。

検出された遺構は、層位関係・出土遺物から次のI～VI期の6時期に大別される。

〔I期〕 耕作土・竹藪の客土からなる厚さ0.5～0.7mの第1層を除去し、褐色土の地山および第2層上面で検出された遺構と、近世陶器などを含む厚さ0.3mの第2層も除去した第3層上面で検出されたものである。前者にはトレンチ北部の34.3m等高線以東で検出された南北溝SD23201とそれに合流すると思われる東西溝2条があり、いずれも正方位をとる。溝SD23201は幅0.3～0.5m、深さ約0.1mである。2条の東西溝は幅約0.25m、深さ0.02mで、1.5m間隔を測る。この他に柱穴や土壤状遺構が数基が確認されている。この期の埋土はいずれも灰褐色土で、遺物は出土していない。後者にはトレンチ北部の34.2m等高線上の褐色土（地山）上面で検出された土壤SK23203と柱穴2個がある。埋土はいずれも淡黄褐色土である。SD23203は径0.45mのほぼ円形を呈するもので、土師器片1点が出土している。

〔II期〕 瓦器・綠釉陶器（火舎ほか）・灰釉陶器などが出土する厚さ約0.2mの第3層を除去した段階で検出された遺構で、土壤SK23202・23206および溝SD23204・23205・23207・23208の他に柱穴P1などの柱穴群がある。

土壤SK23202 トレンチ北部西端。淡茶褐色土（第2層）を除去し、褐色土の地山上面で検出された土壤で、南北1.2m、東西0.5m以上、深さ0.3mを測る。埋土は3層で、淡茶褐色土・茶褐色土（礫まじり）・茶褐色土の順に堆積し、茶褐色土から土師器の細片が出土している。

溝SD23204・23205 トレンチ中央部。淡褐色土（第2層）を除去した段階で、褐色土の地山面が南西方向に急激に落ち込む斜面に沿って検出された溝である。SD23204は北西方向のもので、幅約1.3m、深さ約0.2mで、検出長約7mを測る。この溝は南東から北西へ緩やかに浅くなり、中央部で一段浅くなる。この溝は一度途切れたのち、再び落ち込み溝状を呈する。この溝状遺構SD23205は幅約1m、深さ約0.3mを測る。埋土はいずれも暗褐色土。SD23204から土師器・須恵器・瓦・弥生土器が、SD23205から土師器・須恵器がそれぞれ出土している。なお、SD23204の底面から灰褐色砂礫層に掘り込まれた柱穴が検出されている。この柱穴は1辺0.45mの隅丸方形の掘形で、深さ約0.25mを測る。埋土は暗褐色砂質土で、土師器

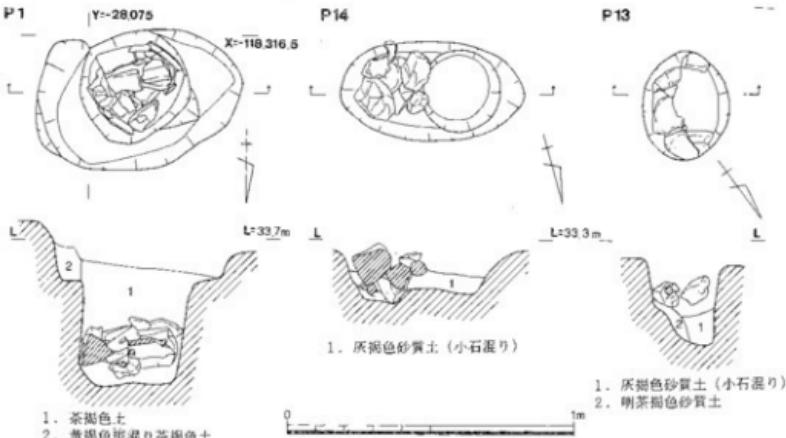
・須恵器・瓦・弥生土器片が出土している。この柱穴に対応するものは残念ながら確認できなかった。

土壇 S K 23206 トレンチ中央部。溝S D 23204に削平された東西0.9m以上、南北0.7mの不整形な土壤で、深さ約0.1mである。埋土は茶褐色土(礫混り)で、弥生土器の器台・甕などの破片が10片ほど出土している。この遺構は弥生時代の単独遺構の可能性をもつが、ここでは層位的にこの時期のものとした。

溝S D 23207 トレンチ南部。茶褐色土(小石混り；第3層1)を除去した段階で検出された北西溝で、幅約0.4m・深さ約0.1mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土で、土師器・須恵器・瓦・弥生土器・石器(石鎌)・炭片が出土している。なお、この溝東端から比較的まとまって丸瓦・平瓦が出土している。

溝S D 23208 トレンチ中央部。茶褐色土(小石混り)を除去した段階で、S D 23204の南側で検出した北西溝で、南東から北西に徐々に浅くなり途切れる。幅0.3~0.9m、深さ約0.2mを測り、4.7m分を検出した。埋土は東壁で茶褐色土(礫混り)・暗褐色砂礫・茶褐色土(黄褐色土混り)・茶褐色土の4層からなるが、北西にいくに従い、最下層の茶褐色土の1層となる。遺物は茶褐色土から土師器・須恵器・灰釉陶器・弥生土器が出土している。

柱穴P 1 (第18図) トレンチ中央部。柱抜き取り穴をもつ1辺約0.4mの隅丸方形状の掘形で、黄褐色斑混り茶褐色土を埋土とする。柱抜き取り穴は、上面で0.4~0.5mの楕円形で、底面で径0.35mの円形を呈し、深さ0.45mを測る。埋土は茶褐色土で、土師器・須恵器・炭片が出土し、底部近くで平瓦の比較的大きな破片と拳大の角礫数個がまとまって出土した。これらは柱穴が破棄された際に一括投棄されたのである。



第18図 Bトレンチ柱穴P 1・P 13・P 14実測図

〔Ⅲ期〕 粘土・シルト・砂・砂礫が交互に堆積した第4・5層を除去した段階で検出した遺構である。トレント中央部で2段になって南西方向に落ち込む自然地形が確認された。この遺構は旧河道の岸肩にあたると考えられる。なお、この遺構の上層に厚く堆積する第4・5層は河川の激しい堆積作用によって形成されたものである。土層はさらにそれぞれ6層と10層に細分でき、堆積の度合は南部においてとくに顕著であり、南壁で厚さ0.4~0.9mを測る。これらの層からは土師器・須恵器・綠釉陶器・瓦・弥生土器・炭片が出土している。

〔Ⅳ期〕 第4・5層と同様に粘質土・砂質土・砂が交互に堆積した厚さ約0.3mの第6層上層を除去した段階で検出した遺構である。中央部でⅢ期同様に旧河道の岸肩にあたる自然の落ち込みと土壤S K 23209・23210・溝S D 23211と、南部で土壤S K 23212・柱穴P 11~16のほかに河床の凹地と考えられる南北方向の溝状の落ち込み数条などが検出された。なお、第6層上層以下からは土師器・須恵器・弥生土器が出土しているが、瓦類や奈良時代以降の土器類は出土していない。

土壤 S K 23209・23210 トレント中央部。暗茶褐色粘質土（第6層上層1）を除去し、黒褐色砂礫（第6層下層3）の上面で検出された遺構である。これらの遺構は重複関係にありS K 23210がS K 23209によって削平を受けている。S K 23209は東西2.0m以上、南北1.5mの楕円形で、断面はすり鉢状を呈し、深さ約0.5mを測る。中から土師器・須恵器が出土している。またS K 23210は径約1~1.2mの円形を呈し、深さ約0.15mを測る。土師器片が1点のみ出土している。埋土はいずれも1層。

溝S D 23211 トレント中央部。暗茶褐色粘質土（第6層上層1）を除去し、黒褐色砂礫（第6層下層3）の上面で検出された北西方向の溝状遺構である。南東から北西に徐々に浅くなり途切れる。東壁で最大幅約1m・深さ約0.15mを測る。ただ、この遺構の埋土が第6層上層1とほぼ同様の暗茶褐色粘質土であることから、人工的に掘られた溝というよりも、むしろ河床の凹地とする方が妥当であろう。

土壤 S K 23212 トレント南部。淡灰褐色砂（第5層7）を除去し、第6層下層2の黒褐色土（茶褐色土混り）上面で検出した長辺1.4m、短辺約0.5mの不整形な土壤で、深さ約0.1mを測る。埋土は黒褐色土で、土師器・須恵器・弥生土器が出土している。とくに須恵器の頭がほぼ完形で出土している（図版8-1-2）。

柱穴P 13・P 14（第18図） トレント南部。暗茶褐色粘質土（第6層上層1）を除去し、黒褐色砂礫（第6層下層3）上面で検出した柱穴である。P 13は長軸約0.4m、短軸0.3mの楕円形を呈する。埋土は灰褐色砂質土（小石混り）と明茶褐色砂質土の二層で、灰褐色砂質土（小石混り）から土師器片とともに拳大の角礫数点が出土している。P 14は長軸0.65m、短軸0.35mの楕円形を呈する。埋土は灰褐色砂質土（小石混り）で、土師器・須恵器片と拳大の角礫数点が東側からまとまって出土している。これらの柱穴から出土した角礫は、出土状況から柱を抜き取った後に投棄されたものと考えられる。

〔V期〕 第6層上層同様に粘質土・砂質土・砂礫が交互に堆積した厚さ約0.3mの第6層下層を除去した段階で、南部の一部を除き灰褐色又は黄褐色砂礫(地山)面で検出された遺構である。中央部で土壤S K23213と柱穴P18と、南部で河床の凹みと考えられる土壤状遺構が検出された。

土壤S K23213 トレンチ中央部。黒褐色砂礫(第6層下層3)を除去し、灰褐色又は黄褐色(地山)上面で検出した土壤で、径0.5mの円形を呈する。埋土は黒褐色で、土師器片が出土している。

〔VI期〕 南部においてV期より下層に粘土・砂・砂礫が交互に堆積した厚さ約0.5mの第7～10層を除去した段階のものである。この面での調査は土砂崩れの恐れや多量の湧水のため一部で掘り下げたにとどまった。無遺物層で地山と考えられる灰褐色砂礫層(第11層)の上面は、さらに南側に落ち込む。このことから旧河道の河床はさらに南側に続くと考えられる。なお、第7～10層からの出土遺物は比較的少ないが、古墳時代の土師器・須恵器や弥生土器がある。

以上6期に分けて検出遺構を述べてきたが、中央部以南では土層および遺物の出土状況がほぼAトレンチと同様の様相を呈しており河道の河床部分であったことが判明し、北部では河床の基盤となる砂礫層の上に堆積した褐色土層が河道の岸部の基盤となっている。ただ、河床からも土壤・柱穴などの遺構が検出されており、流路の変更又は河川の流れによって河道の岸部は出入りがあり、陸化した時期には河床を人々が土地利用している状況が確認された。

4 まとめ

今回の調査により、当初期待していた乙訓寺および今里遺跡に関する遺構が検出され、多量の遺物が出土した。遺構は主に段丘上を開析する旧河道に関するもので、今里地区の旧地形復原および乙訓寺の寺域を検討する上で貴重な成果を得ることができた。

調査地は旧河道の左岸から河床に至る部分にあたり、遺構はほぼ層位的に検出され、BトレンチではI期からV期にわたりその変遷が確認された。これらの変遷時期および遺構の性格に関しては、出土遺物の整理を待ってから詳細に検討する必要があるが、ここでその概要について述べておこう。

A・Bトレンチの基本的層位はほぼ同様で、無遺物層の堅固な砂礫からなる地山面(第11層以下)の上に粘土・砂・砂礫等を交互に堆積する土砂(第4～10層)があり、さらにその上層には水平に堆積した客土・耕作土(第1～3層)がある。

旧河道による堆積層は第4～10層であり、その最大の厚さはAトレンチで1.6m、Bトレンチで1.5mを測り、激しい川の堆積作用を物語っている。この堆積層は瓦類等の出土遺物から第4・5層と第6層以下とに大きく2時期に分けられる。第4・5層からは瓦や平安時代初ごろまでの土師器・須恵器や弥生土器等が出土し、第6層以下では瓦の出土は認められず、6世紀末～7世紀初以前の土師器・須恵器や弥生土器が出土している。また、Bトレンチの最下層第10層

からは弥生土器とともに須恵器が出土している。このことから、この河道は古墳時代から平安時代初のものであり、第4・5層が6世紀末～7世紀初以降に、第6層以下が6世紀末～7世紀初までにそれぞれ堆積したものであると判明した。これらの堆積層から出土した遺物は付近に生活を営んでいた人々によって投棄されたものであり、前者は古代の乙訓寺に、後者は弥生時代から古墳時代の集落跡である今里遺跡に関するものであると考えられる。ただ今回の調査は、河道の河床の一部分で、河道の時期は断定が困難であり、その規模についても明らかにし得なかった。また、先に述べたとおり各時期において河床部分から遺構が検出されている。これらは河道の流れによって一時期陸化した河床を人々が土地利用していたことを示すものである。とくにBトレンチのⅡ・Ⅳ期では溝のほかに土壠や柱穴があり、その性格が留意されたが、調査面積が狭い為明らかにし得なかった。

一方、この旧河道の上にある第2・3層は、瓦器のほかに平安時代以前の土師器・須恵器や弥生土器・瓦が大量に混入し、約0.5mの厚さで堆積している。このことは中世頃までに人为的に整地され、河道が完全に廃絶したことを物語っている。

(7)

ところで、この旧河道は、日下雅義氏の地形分類によると、段丘下位とその上に土砂が堆積し形成された扇状地の境に沿ってほぼ北西から南東に流れ、下流で現在も流れる風呂川に注ぐもので、この旧河道の痕跡を示す小川が現在も流れている。



第19図 周辺地形と乙訓寺 (1/5000, 百瀬氏作図に加筆・修正)

最後に乙訓寺の寺域について述べておこう。寺域は、前述のとおりこれまでの発掘調査成果や周辺の条里の検討などから、少なくとも長岡京期には東西3町・南北2町の規模で、当地はその西辺にあたると推定されている。この旧河道が検出されたことにより、当地が推定通り寺域の西辺であると考えてほぼ間違いないであろう。これは河道から出土した大量の瓦や縁釉陶器等の土器類からも裏付けられる。とくに瓦類は軒平瓦1点を除き丸瓦・平瓦であるが、Aトレチのすぐ東側で検出された、瓦溜りSK800101から出土した寺創建期の所用瓦と同様の特徴をもつものである。したがって、乙訓寺は第19図のとおり西側が北西から南東に流れる河道、北側が大正寺川、南側が風呂川によって画される段丘上に立地していたと言えるであろう。

- 注1) なお、(財)長岡京市埋蔵文化財センター白川成明・奥村暁美氏に多大なご協力を得た。
- 2) 乙訓寺は、寺伝によると聖德太子の開基とされるが、境内を中心に出土する瓦からみると、飛鳥時代に溯源ることはなく、奈良時代前期に求める説が有力視されている。
- 3) 百瀬ちどり・中尾秀正「まとめ」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 1984年
- 4) 吉本堯俊「乙訓寺発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』1967年
- 5) 百瀬ちどり・中尾秀正「まとめ」第106図今里地区の地形(日下雅義氏原図) 長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 1984年
- 6) 竹井治雄「長岡京跡第8001次(7 A N I K U地区)立会調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 1984年
- 7) 注5に同じ
- 8) 注3に同じ、第113図

第3章 長岡京跡右京第249次(7ANE-4地区) 調査概要

—右京三条二坊五町（三条第二小路）・今里北ノ町遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、1986年11月25日から12月24日まで、長岡京市野添一丁目47-5他において実施した長岡京跡右京三条二坊五町（三条第二小路）推定地、および今里北ノ町遺跡の発掘調査に関するものである。
- 2 本調査は、宅地造成工事に伴う事前の発掘調査であるが、三条第二小路を究明するため、国庫補助金の一部を使用した。調査面積は約125m²である。
- 3 調査は、長岡京市教育委員会が主体となり、調査員は（財）長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、山本輝雄が現地を担当した。
- 4 発掘調査および本報告の作成にあたっては、京都文教短期大学教授 中山修一、立命館大学教授 日下雅義、京都府山城郷土資料館 橋本清一の各氏より種々の御教示を受けた。
(1)
- 5 調査後の遺物実測や図面製図には、多くの方々の協力を得た。
- 6 本報告の執筆ならびに編集は、山本が行った。



第20図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

1986年10月、大成ハウス株式会社より長岡市野添一丁目47—5他において宅地造成工事の計画がある旨、長岡市教育委員会に届出があった。届出地は、阪急長岡天神駅の北方約1.1km、新興住宅街の一角に位置している。地形的には、東の小畠川と西の風呂川とに挟まれた氾濫低地に立地しているが、現状は造成地であるため、地表面の標高は23.7mと付近の水田面よりも1mほど高くなっている。長岡京の条坊復原によると、右京三条二坊五町の北東部にあたり、北辺には三条第二小路が想定される所であった。この三条第二小路については、右京第37(2)次調査で南側溝と推定される東西溝が検出されており、その西に隣接する当該地でもその延長部分の存在することが充分予想された。届出を受けた市教育委員会では、遺跡の重要性を鑑み、発掘調査が必要との判断を下した。調査は、国庫補助事業として市教育委員会が担当することになり、財團法人長岡市埋蔵文化財センターから調査員を派遣してこれを実施した。

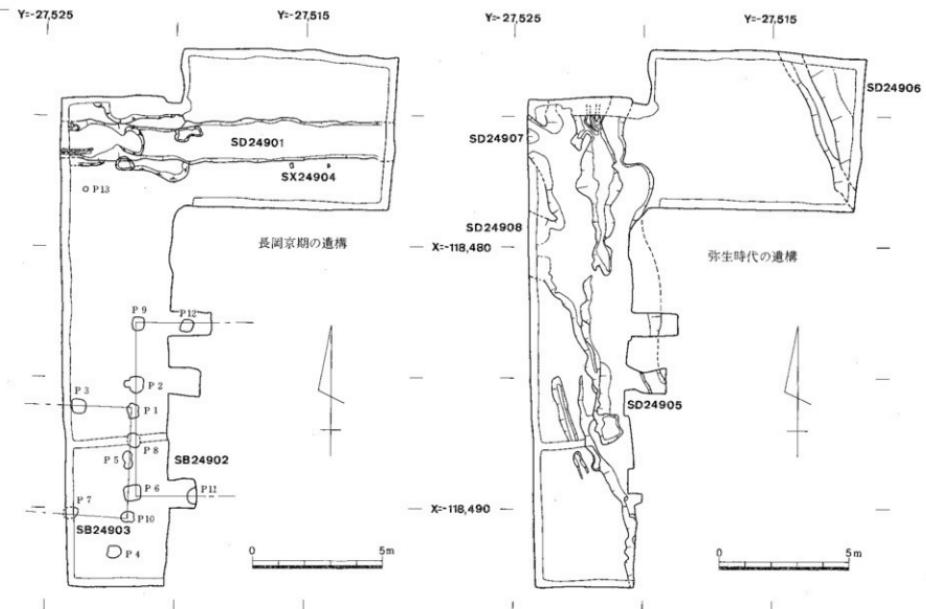
調査では、三条第二小路の確認に主眼をおき、発掘区の設定を行うことにした。発掘区は、調査対象地の北寄りに東西約8m、南北約6mの第1トレントと、その西端から南へ東西約4m、南北約13mの第2トレントを設定した。調査は、1986年11月25日に着手し、重機を用いて盛土、耕土、床土を除去した後、人力で遺構検出に努めた。その結果、擾乱を受けた所が一部あったものの、長岡京期の遺構面を確認し、第1トレントでは東西溝を、また第2トレントでは掘立柱建物の一部を検出したため、第2トレントを南へ5.5m分と東へ3ヶ所部分的に拡張した。さらにその下層において、弥生時代と推定される遺構の存在が明らかとなり、4条の自然流路を検出したが、とめどない湧水の影響で、壁面の崩壊や排水作業など調査の進行に障害をもたらした。こうして、現地での調査を終了したのは年の瀬の12月24日で、125m²の小規模な調査面積ではあったが、大きな成果を得ることができた。



第21図 発掘作業風景



第22図 発掘区概念図



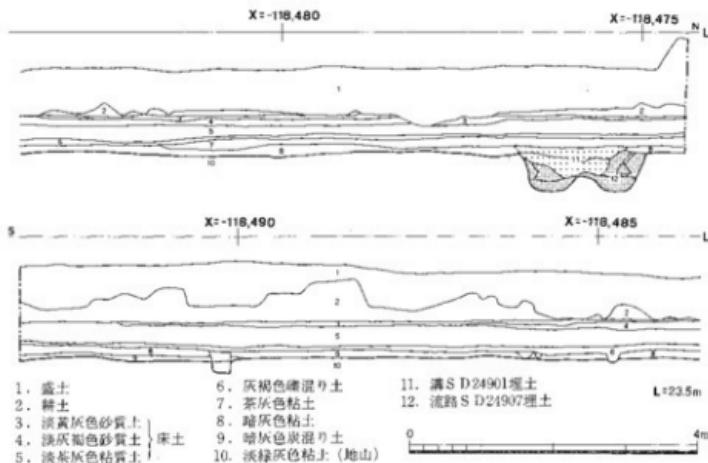
第23図 検出遺構配置図(1/150)

3 検出遺構

調査地は、先にも述べたが既に造成されており、地表面より0.6~1.3mまで盛土が厚く施されている。盛土以下の基本層序を述べると、耕土と床土があり、その下に灰褐色礫混り土が発掘区の全域に広がっている。床土は、第2トレンチでは0.25mと厚く、第1トレンチでは0.1mと薄い。灰褐色礫混り土は、厚さ約0.1mほどの薄い層で、土師器・須恵器・瓦器などとともに0.05m大前後の疊を多く含んでいることからみて、洪水による氾濫の影響を被って堆積した土層と考えられる。この層の下には、茶灰色粘土と暗灰色粘土がそれぞれ0.1~0.2mほどの厚さで堆積していた。このうち、前者は第2トレンチの南半部には認められないが、長岡京期を含む平安時代前期の遺物を多く包含している。一方、後者は全域に広がる堆積層であって、長岡京期の遺構はこの上面において検出した。暗灰色粘土の下が、淡緑灰色粘土の地山となっている。ただし、第1トレンチでは暗灰褐色砂質土が、また第2トレンチの南部には暗灰色炭混り土がそれぞれ地山の上に堆積している。地山面は、南北方向がほぼ平坦であるのに対して、東西方向では西から東へなだらかに傾斜している。弥生時代と考えられる下層遺構のすべては、この地山面で検出した。

(1) 長岡京期の遺構

長岡京期の遺構としては、溝1条と掘立柱建物2棟などがある。いずれも暗灰色粘土層の上面において検出したが、その上面を覆う茶灰色粘土層から長岡京期の土師器、須恵器、瓦など



第24図 第2トレンチ西壁土層図(1/80)

が少なからず出土していることから、溝構面はいくらか削平を受けている可能性が強い。

溝 S D 24901 (第23・25・26図、図版9・10) 第

1 トレンチから第2トレンチの北部にかけて、長さ約13m 分を検出した東西方向の素掘り溝である。溝の一部は、かつて擁壁工事の掘削で、擾乱を受けている。幅1.4~1.5m、深さ0.2~0.4mほどの規模をもち、東西とも発掘区域外に続いている。溝の掘肩は、南辺が直線的であるのに対して、北辺は若干の出入りがあった。溝内には、足跡とみられる凹みが顯著に認められ、底部はおおむね西から東に向ってゆるやかに傾斜している。溝内の堆積層は、粘質土が西端部でわずかに認められた以外は、ほとんど砂礫層であり、かなりの流水があったことを示している。堆積層中からは、土師器、須恵器、瓦、陶硯、木製品などがまとまって出土しており、長岡京期に埋没したことが明らかとなった。また、溝の西端において、北辺には人頭大の自然石を2個置き、南辺には側板を杭で固定した護岸施設が認められた。側板は、転落した状態のものが1枚あり、角杭も溝の中に向って彎曲していた。当所は、後述のごとく下層に自然流路があり、地盤が弱いゆえに上記のような護岸が施されたのであろう。この溝は、その検出位置や規模などからみて、右京第37次調査でのS D 3703に連接することは明らかで、三条第二小路の南側溝に比定することができる。

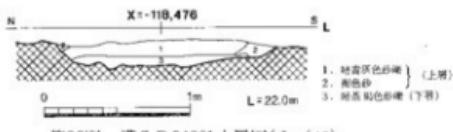
なお、第1トレンチの東寄りで、S D 24901の南辺から約0.25mの所に入頭大ほどの石を2個並べ置いたS X 24904がある。東側の石材はチャート、西側の石材は凝灰岩(3)を用いており、両者の間隔は約1.4mある。これらと対になるものが、溝の北側では未検出なので、断定しえない。

付表-2 通構座標表



第25図 溝 S D 24901実測図(1/80)

通構番号	方向	国 土 庫 標		標 高	備 考
		X 座標	Y 座標		
溝 S D 24901	東 西	-118,476.1	-27,512.3	21.75	三条第二小路南側溝



第26図 溝S D 24901土層図(1/40)

いが、溝を渡す簡易的な橋の礎石になる可能性を想定できよう。

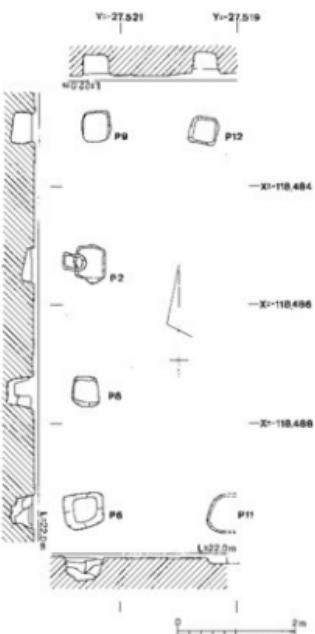
掘立柱建物 S B 24902 (第23・27図、図版11)

第2トレンチの南部において検出した、東西1間以上、南北3間の南北棟建物で、梁行は発掘区域外へのびている。柱間は、桁行が北から2.4—2.1—2.1m、梁行は北辺が2.1m、南辺が2.4mといずれも不揃いである。建物の主軸はほぼ真南北、真東西を向いている。柱掘形は、一辺約0.5mほどの隅丸方形を呈しているが、柱根はもとより、柱痕跡も不明瞭であって、わずかにP2において柱抜き取痕が確認されたにすぎない。柱掘形内からは、土師器、須恵器、瓦の破片が少量出土している。

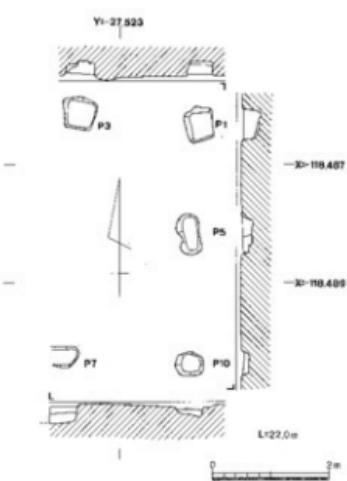
掘立柱建物 S B 24903 (第23・28図、図版11)

S B 24902の西にある東西1間以上、南北2間の東西棟建物で、桁行は発掘区域外へ続いている。S B 24902と重複関係があるものの、柱掘形どうしの切り合いをもつものがないので、両者の前後関係は不明である。柱間寸法は、桁行・梁行とも2.1m(7尺)等間で、建物の主軸は東で南に3°50'ほど振れている。柱掘形は、一部いびつな形のものもあるが、おむね一辺約0.5mほどの隅丸方形を呈する。柱掘形内の遺物は少量であるが、土師器、須恵器、瓦などの破片が出土した。

この他、建物や柵例としてまとまらない2個の柱掘形(P4・P13)がある。このうち、P13からは重圓文の軒丸瓦が1点出土している。



第27図 掘立柱建物 S B 24902実測図(1/100)



第28図 掘立柱建物 S B 24903実測図(1/100)

(2) 弥生時代の遺構

弥生時代と推察される遺構としては、S D 24905～S D 24908の自然流路が検出されている。いずれの流路も、自然地形の傾斜に沿った方向に流下しているが、そのうちS D 24907とS D 24908がS D 24905に合流して注ぎ込んでいる。

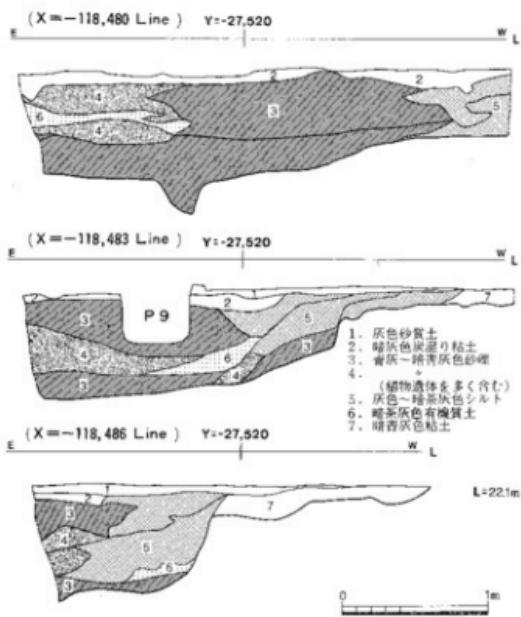
流路 S D 24905 (第23・29図・図版12・13) 第2トレンチのほぼ全域を占めるような状態で検出した、北北西から南南東に延びる自然流路である。幅2.8～3.2m、深さ0.7～0.9mあって、側壁面は東西ともかなり急傾斜をなして落ち込んでいる。両岸は、いずれも出入りが顕著で、特に東岸の一部ではコブ状に丸く張り出していた。この位置は、流路 S D 24907が合流する地点の対岸にあたり、S D 24907から注ぎ込む流水によって丸く抉り取られたものと推測される。流路の底部は、北側において南北に細長く凹み深くなっているものの、おおむね北から南に向って次第に下降している。流路内には、砂礫や流木等を多量に含む有機質土、それにシルトが互層となって堆積しており、層序もかなり乱れていた。この流路からは、弥生土器の破片が数点出土したにすぎない。

なお、この流路にはS D 24907とS D 24908の2本の流路が西から合流して注ぎこんでいる。前者は幅約1.2m、深さ約0.5

m、後者は幅約2.2m、深さ約0.5mほどあるが、ともにその一端しか確認していないので詳細は不明である。

流路 S D 24906 (図版13)

第1トレンチの東端で検出した北西から南東に流下する自然流路である。流路の西岸しか確認していないので、その全容は不明だが、幅約2.8m以上、深さ約0.7mを測る。この流路は、先のS D 24905に比べ側壁の傾斜角がゆるやかで、しかも2段に落ち込んでいた。流路内は、砂礫と粘土の互層堆積であるが、遺物はほとんど出土していない。



第29図 流路 S D 24905土層図(1/40)

4 出土遺物

今回の調査では、土器類、瓦類、土製品、木製品の他、植物遺体など各種の遺物が整理箱にして20箱ほど出土している。これらの遺物は、包含層および溝、建物、自然流路などの遺構から出土したもので、古くは弥生時代に属するものから新しくは鎌倉時代に至る時期のものがある。それらの中で、量的には長岡京期の遺物が大部分を占め、弥生土器や古墳時代の須恵器、それに長岡京期以降の縁釉陶器、灰釉陶器、白磁、瓦器などの遺物はごく少量である。ここでは長岡京期の遺物を中心に説明した後、今里北ノ町遺跡に関する長岡京期以前の遺物について概略したい。

(1) 長岡京期の遺物

おもに溝S D24901からまとめて出土した他、掘立柱建物の柱掘形や包含層からも出土している。出土遺物のうち、土師器と須恵器が圧倒的に多く、瓦類がそれに次ぎ、黒色土器や製塙土器、それに土製品（陶硯・甌）、木製品なども若干ある。したがって、出土量の多い土師器、須恵器については遺構ごとに分けて記述し、その他の遺物についてはまとめて報告する。なお、土師器、須恵器の器種名および調整手法についての呼称法は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅴ・Ⅵでの諸例に準拠した。

溝S D24901出土土器（第30・31図、図版14・15） 溝内の堆積層は2層に分れるが、層位ごとで土器の様相に差異はなく、しかも互いに接合できた例が認められたため、ここでは一括して報告する。なお、砂礫層からの出土とはいえ、土器の遺存状況は比較的良好で、顕著な摩滅を受けたものは少ない。

付表-3に示したごとく、土師器と須恵器の比率は49:51の割合となり、両者は量的に拮抗している。これらの土器類を用途別にみると、食器が69%、貯蔵器が22%、煮炊器が9%となり、土師器と須恵器それぞれの食器が占める割合（約70%）と合致する。

土師器には、壺A、壺B、壺B蓋、皿A、碗A、壺B、壺E、高壺A、甌Aなどがある。

壺A（1～4）は、口縁部が外上方に開き、端部を内側に巻き込むことを常とする。内面はいずれもヨコナデし、外面は底部から口縁端部までヘラケズリするc手法（1・4）、底部と口縁部下半をヘラケズリするb手法（2・3）の2者がある。b手法の土器は、口縁部上を強くヨコナデしたため、やや外反気味になる。胎土には赤色粒を含み、橙褐色を呈するものが多い。法量からみて、壺A IIに属する。1・2の底部外面には、墨書きされている。

壺B（5）は、壺Aの底部に断面台形の高台を貼り付けた土器。外面は、c手法の後ヘラミガキを加え、内面はヨコナデ調整している。胎土はきめ細かく、淡灰橙色を呈するが、この他に茶褐色を呈し、赤色粒や石英などを多く含む粗目な胎土のものもある。6は、壺B蓋のつまみ部で、胎土と色調は壺Bの後者に類似する。

付表-3 満S D24901出土土器集計表

(土師器)

(須恵器)

器種		個体数	%
食器	A	4	
	环	3	
	B	3	
	B蓋	1	66.6
皿	A	8	
	塊	7	
貯藏器	B	4	
	E	1	15.2
煮炊器	甕	5	
	竈	1	18.2
合計		33	100

器種		個体数	%
食器	A	7	
	环	15	
	B	8	
	B蓋		71.4
皿	B	1	
	盤	1	
高环		1	
	G	1	
貯藏器	L	3	
	M	1	28.6
甕	N	1	
	竈	4	
合計		35	100

食器	貯藏器	土師器+須恵器
----	-----	---------

食器	貯藏器	土師器
----	-----	-----

食器	貯藏器	須恵器
----	-----	-----

0

100%

皿A（7～10）は、法量により皿AⅠ（10）と皿AⅡ（7～9）に分れる。皿AⅠは口縁端部を内側に巻き込み、外面の調整はb手法とc手法（10）がある。皿AⅡには、口縁端部を内側へわずかに巻き込むもの（7・8）と、まっすぐ終るもの（9）がある。外面の調整は、先の2手法に加えてe手法のものが存在する。皿AⅠ・Ⅱとも、胎土や色調は壺Aや壺Bに共通するものが多いが、なかには淡桃色を呈し、精良な胎土をもつ特徴的な土器（9）がある。

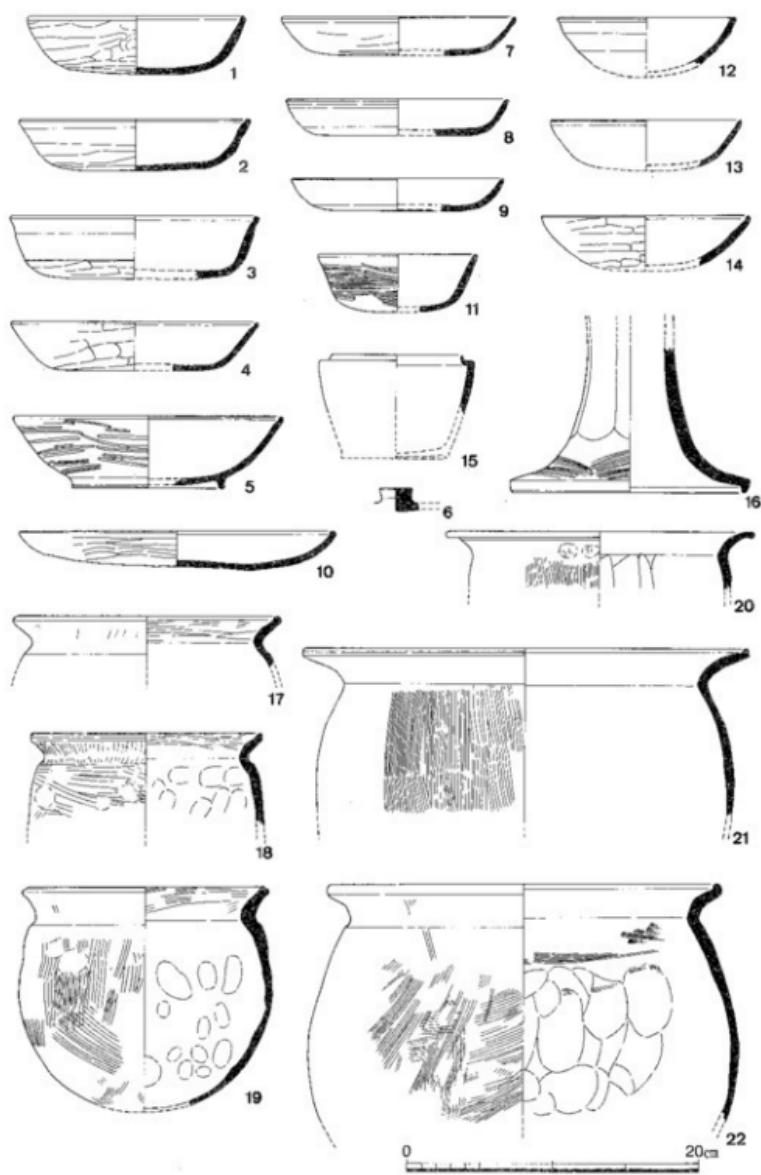
壺A（11～14）は、口径12～14cmほどの壺AⅠ（12～14）と、10cm前後の壺AⅡ（11）に分れる。壺AⅡとした11は、長岡京で普遍的にみられる壺Aの形態よりはむしろ、壺Aに近似し、外面の調整についても、e手法の後、密にヘラミガキを施す点で特異な存在だといえる。壺AⅠは、口縁端部をわずかに折り曲げて突出させるもの（14）と、すなおに終るもの（12・13）が認められるが、後者の量が多い。内面はすべてヨコナデ調整し、外面はe手法で仕上げるもの（14）、口縁上部のみをヨコナデし、以下を調整しないe手法（12・13）がある。胎土や色調は、緻密で淡灰橙色を呈するもの、赤色粒を多く含み橙褐色を呈するものなどがある。なお、壺Aと考えられる土器の内面に、漆の付着したものが1例認められた。

壺Bは、いわゆる墨書き人面土器と称される類の壺で、大小の2種が存在する。いずれも小片であるため図示していないが、大型品は口縁端部をつまみ上げているのに対して、小型品（口径8cm前後）ではすなおに終っている。いずれも口縁部を強くヨコナデし、以下は未調整である。なお、人面の一部かと思える墨描した破片が1点ある。

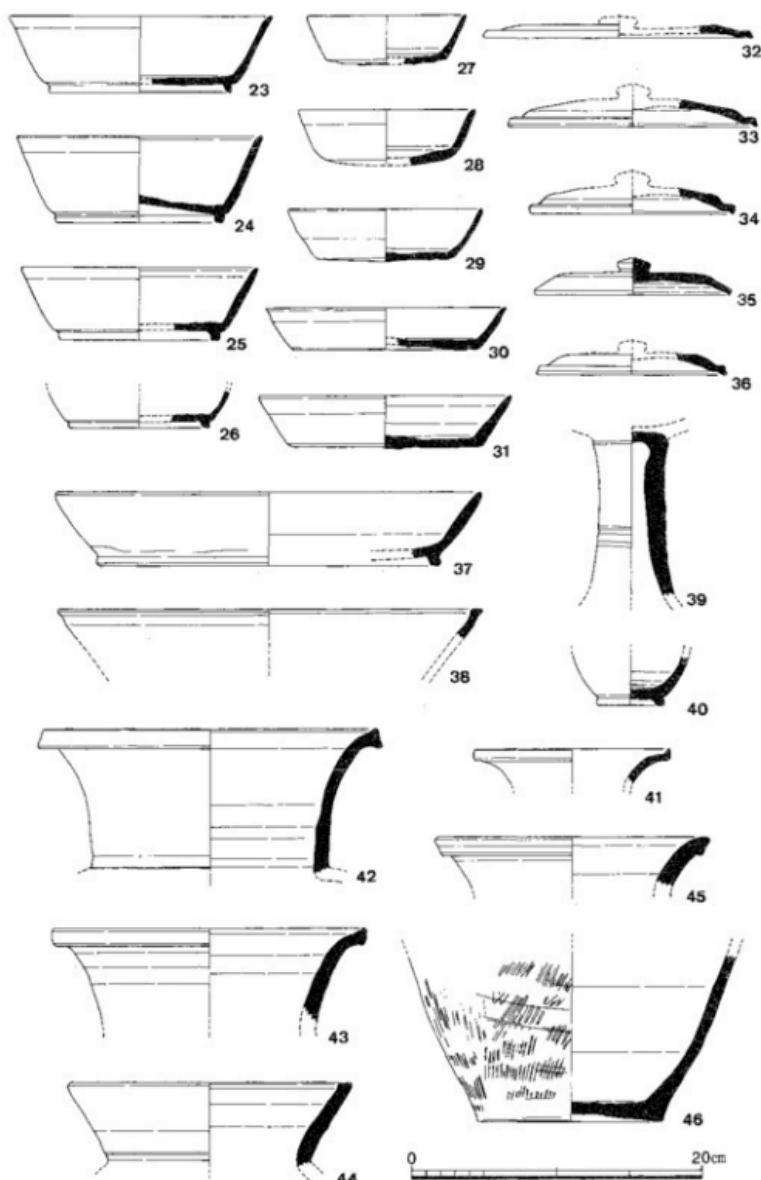
壺E（15）は、体部上端がするどく内折して肩をなし、内傾気味の短い口縁部がつく小壺。摩滅が顕著であるものの、体部外面はヘラケズリしているようである。

高壺A（16）は、脚柱部から裾部にかけての破片。脚柱部は、粘土紐を巻き上げて作製（a手法）した円筒の外面を縦方向にヘラケズリし、七角形に面取りを行っている。面取りは、裾部側から壺部側に向って施しているようである。裾部は、外下方に大きく開き、端部を下方に突出させている。裾部の外面は、ヘラミガキを施しているが、1周を6分割するように行っている。胎土には、赤色粒や長石などを多く含み、橙色を呈す。

壺（17～22）は、全形の知られるものがなく、そのほとんどは壺Aになるものと思われる。口径26cm以上の大型品（21・22）と、21cm以下の小型品（17～20）がある。大型品には、口縁部が「く」の字状にするどく外折し、屈折部から胴部へなだらかに移行する形態（21）と、口縁部が「く」の字状に外折するが、その度合はゆるやかで、肩部に明瞭な稜線のみられるもの（22）がある。前者は、口縁端部を上方につまみ上げて突出させ、端面に沈線を1条巡らしている。内面の調整は、ヨコナデが丁寧に強く施されているため、口縁部のハケメを消去し、屈折部に稜線が生じている。外面は、口縁部をヨコナデし、屈折部以下を縦位のハケメを施す。胎土には、比較的大きめの砂粒を多く含み、淡茶灰色を呈するが、硬質に焼成されており、他の壺とは様相を異にする。後者は、口縁端部を内側に巻き込み、肩部にみられる稜線は強くヨコナデ



第30図 溝S D 24901出土土師器実測図(1／4)



第31図 満S D24901出土須恵器実測図(1/4)

することによって生じたものである。この形態の甕は、長岡京で普遍的にみられ、後述する小型品の中にもかなり存在する。内面は、口縁部と頸部からやや下ったところまでをヨコナデし、以下はナデ調整している。肩部外面は、斜位のハケメを施した後、粗くナデを加えてハケメの一部を消す。小型品の形態は、大型品の22に類似するもの(17~19)と、口縁部が大きく外反するもの(20)がある。口縁端部は、内側に巻き込むもの(17~20)、上方にわずかに突出させ、端面に沈線を巡らすもの(18~19)がある。17~19は、いずれも口縁部内面に横位のハケメを施し、外面も斜位のハケメで調整している。このうち、18~19の外面には煤の付着がみられ、19では底部内面にまで及んでいる。胎土や色調は、赤褐色で細かい砂粒を多く含み粗目な素地のもの(20)、胎土が比較的密で淡灰橙色を呈するもの(17~19)などがある。

須恵器には、环A、环B、环B蓋、皿B、盤、高环、壺G、壺L、壺M、壺N、甕などの器種がある。

环A(27~31)は、法量によって口径17cm前後の环AⅠ(30~31)、口径11~13.5cmほどの环AⅡ(27~29)とに分れる。环AⅠは、口径に対して器高が低く、皿Aの法量に近似している。口縁部は大きく外上方に開き、端部を丸くおさめている。底部は平坦で、外面にはヘラ切りの痕跡をとどめている。环AⅡは、口縁部が内脇気味に立ち上り、底部は平坦なものと丸味をもっているものがある。环Aは、全体的にみて灰白色を呈する軟質なものが目立つ。また、火擣を受けたもの(27~31)や内面に黒色物の付着が認められるもの(30)もある。

环B(23~26)も、法量により口径16~18cmの环BⅡ(23~26)と、口径12~14cmほどの环BⅢがある。口縁部は、おおむね直線的に立ち上るが、なかには外反気味に開くもの(23)もある。硬質に焼成され、灰色もしくは青灰色を呈するものが大半を占め、环Aとは対照的な様相を呈する。

环B蓋(32~36)は、环Bと同様口径によって环BⅡ蓋(32~33)、环BⅢ蓋(34~36)に分れる。形態的には、器高が低く扁平なものと、笠形の天井部を有するものがあり、前者は环BⅡ蓋に、後者は环BⅢ蓋に多い傾向がある。また、口縁端部が屈曲しないB形態(35)も存在するが、ほとんどは端部が屈曲するA形態である。硬質に焼成されたものが多く、軟質焼成は少ない。

皿B(37)は、口径が29.3cmもある大型品で、器壁も厚手である。軟質に焼成されており、胎土には砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

盤(38)は、内外に拡張させた口縁端部をもつ。硬質に焼成され、暗青灰色を呈す。

高环(39)は、脚柱部の破片であって、全形は不明である。脚柱の上端に1条、中央部に2条の沈線を巡らせている。焼成は、須恵質というよりも瓦質に仕上げられており、内外面とも炭素が吸着している。こうした瓦質焼成の土器は、环Aもしくは环Bの口縁部片の中に1点認められるが、類例に乏しく注目される資料である。⁽⁴⁾

壺Gには口縁部の細片が1点ある。内外面は暗青灰色、断面が赤褐色の色調で、通常の壺G特有の様相を呈している。

壺L(41)は口縁部の破片で、端部を上方に突出させているが、上下に拡張させたものもある。口縁部内面に、自然釉の付着するものが多い。

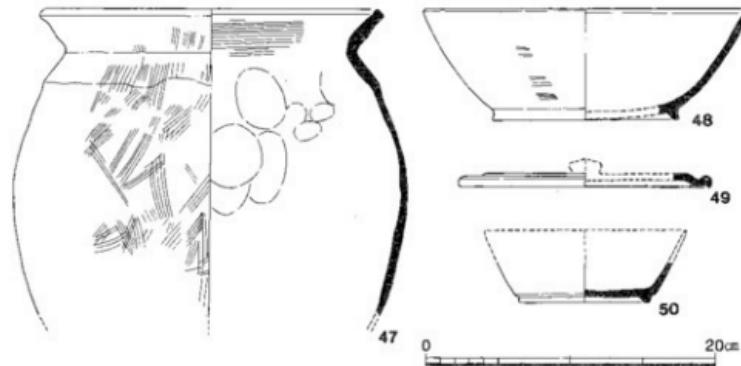
壺Mは壺Lの小型品であって、底部に高台を有するもの(40)と、無高台のものがある。この他、図示し得なかったが、肩部に耳状の把手を貼り付けた壺Nとみられる破片がある。

甕(42~46)はすべて破片であり、全形の知られる例は皆無である。口縁部はいずれも大きく開いているが、端部の形態には種々あって、端部を上下に拡張させるもの(42・43)、わずかに内方へ肥厚させるが水平面をもつもの(44)、下方に拡張させるもの(45)などがある。42と44の頸部には、沈線が施されている。46は、平底を呈する甕の底部と考えられ、外面は平行タタキの後ナデ、内面は同心円の当て具痕を丁寧にナデ調整して消している。いずれも硬質に焼成され、自然釉の付着するものが多い。

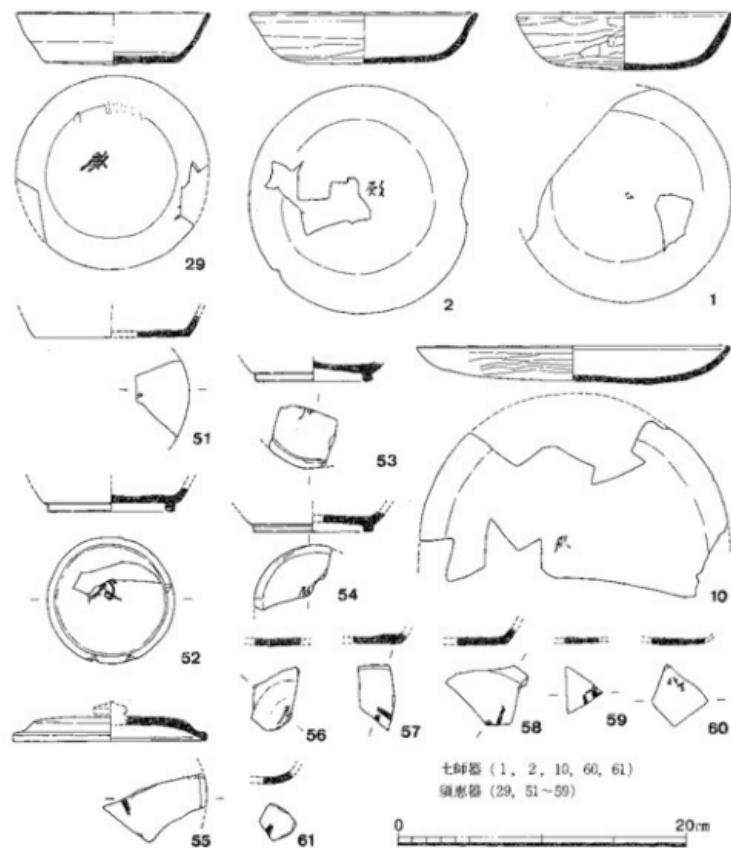
掘立柱建物 S B24903出土土器 (第32図) 建物の掘形内より少量の土器と瓦が出土している。土器には土師器と須恵器の2種あるが、細片が多くて図示可能なものは少ない。

土師器は、环B、甕Aなどがある。环B(48)は、口縁部が内壁気味に立ち上り、端部を内側に巻き込んで丸くおさめている。外面はc手法の後ヘラミガキを施し、内面はヨコナデ調整している。甕A(47)は、P4・5・7・10出土のものが接合できた土器である。球形に近い体部と、「く」の字状に外折してのびる口縁部をもち、端部を上方に突出させている。外面の調整は、縦位にハケメを施した後、口縁部にヨコナデを施してハケメをナデ消し、体部には斜位のハケメやナデを加えている。口縁部内面と外面には、煤の付着が認められる。

須恵器には、环B(50)、环B蓋(49)、壺、甕などがある。49の环B蓋は、天井部が扁平で、



第32図 掘立柱建物 S B24903出土土器実測図(1/4)



第33図 墨書き土器実測図（1／4）

口縁端部を屈曲させるA形態をとる。

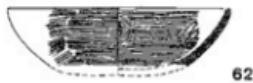
墨書き土器（第33図、図版15、付表一4） 墨書き土器は、付表一4に示したとおり満S D24901から10点、包含層から6点の計16点が出土している。その内訳は、土師器6点、須恵器10点と須恵器の量が多いものの、器種はいずれも壺・皿など供膳形態の土器に限られている。墨書きの記載位置をみると、壺・皿では底部外面、蓋では頂部内面で、内外両面とも記載する例はない。そのうち、記載内容の判読できるものはほぼ半数あって、そのいずれもが「殿」1字のみであることは注目に値する。

付表一4 黒書土器一覧表

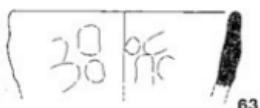
番号	内 容	器 種	記載位置	出 土 遺 構	実測図番号
1	殿	土 師 器	环 A	底部外面	溝 S D 24901 2
2	殿	"	"	"	1
3	殿	"	皿 A	"	10
4	□	"	境 A	"	
5	□	"	环 or 皿	"	60
6	□	"	"	"	61
7	殿	須 惠 器	环 A	"	29
8	□	"	"	"	58
9	□	"	环 A or B	"	59
10	□	"	环 A	"	51
11	殿	"	环 B	"	遺物包含層 52
12	殿	"	"	"	53
13	殿	"	"	"	54
14	□	"	环 B 蓋	天井部内面	55
15	殿	"	环 A or B	底部外面	56
16	□	"	环 A	"	57

黒色土器（第34図、図版15） 黒色土器は、溝 S D 24901から3点出土しているが、いずれも内面のみを黒色化させる黒色土器A類である。环A（62）は、内外面とも密にヘラミガキを施し、内面にはさらに花文状の暗文で装飾を加えている。胎土はきめ細かく、外面は桃色を呈する。この他、図示していないが、胎土中に角閃石や雲母を多く含み、茶褐色を呈する生駒山西麓産の环Aと考えられる底部片がある。

製塙土器（第34図、図版15） 製塙土器は、溝 S D 24901および包含層から出土しているが、そのほとんどは細片で、図示できたものはわずか3点にすぎない。63～65は、いずれも溝 S D 24901出土のものである。63は、口縁部がほぼ直立する厚手の土器で、端部は丸くおさめる。64は、外反する口縁部をもち、端部を丸く終らせる。65は、尖り気味の口縁端部を内傾させ、63・64に比べかなり器壁が薄い。いずれも胎土が粗く、砂粒を多量に含んでいるが、なかには緻密な胎土をもつものや、植物を混和材として含ん



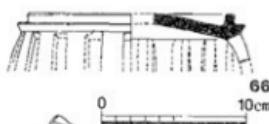
62



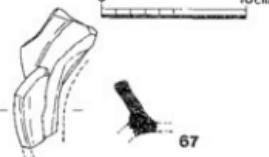
63



64



65



66

第34図 黒色・製塙土器、土製品実測図(1/4)

でいるもの（65）がある。内外面の調整は、粗いナデを施す場合が多く、内面にハケメを行うものや、極めて密な布目痕の残るものがある。

土製品（第34図、図版15） 土製品には、陶硯、甕などがある。

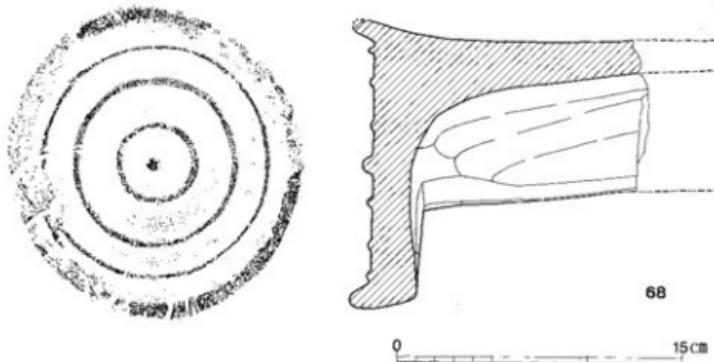
陶硯は、溝S D24901から2点出土している。66は、圜脚円面硯の硯面部片である。硯面は、海部から陸部にかけてなだらかに移行し、両者の区分は不明瞭である。硯面には、墨痕はもとより研磨の形跡もほとんど認められない。外堤はやや外方に突出し、上端は平坦面をなす。外堤径14.1cmを計る。外堤の下端には、断面三角形の凸帯を巡らせ、圜脚部には幅約1cmの長方形透しを17個（推定）配している。胎土は、砂粒をほとんど含まず精良で、暗灰色を呈する。硯面部を除く外面に、自然釉の付着が認められる。他の1点は、脚端部の細片なので、詳細は明らかではない。

甕（67）は、付け底をもつ甕の底片で、底部の幅から判断して基底部に近いところと思われる。淡灰褐色を呈し、底の表面には煤とみられる黒色物が付着している。

瓦（第35図・図版16） 瓦類は、溝、建物の柱掘形、包含層から出土しているが、土器類に比べて少量で、そのほとんどが平瓦、丸瓦である。軒瓦には、軒丸瓦が1点あるにすぎない。

軒丸瓦（68）は、P13から出土した重圜文軒丸瓦である。丸瓦部の後端と、瓦当外縁の一部を欠失しているが、全体に残存度は良好である。瓦当の文様は、中心に珠点を配し、その周囲に圓線を3重に巡らせたもので、直径約150cmを計る。第1圓線から外区へ至る各圓線の間隔は、外側に向うほど狭くなる傾向があり、平城宮6012A型式に属するものと考えられる。瓦当裏面の下半には、布目の痕跡がわずかに残っている。胎土には、1~2mm大の砂粒を多量に含み、瓦質に焼成されている。

平瓦・丸瓦の大半は、溝S D24901および包含層から出土しているが、完形品は1点もない。平瓦は、凸面に繩タタキを施すものが多く、軟質焼成のものと、硬質焼成（瓦質・須恵質）の



第35図 軒丸瓦実測図（1／3）

ものなど種々ある。丸瓦には、玉縁が付く。

木製品 (第36図・図版15) 溝S D24901から出土した曲物や杭などの他に、遺物包含層から漆器が出土している。⁶⁹は曲物の底板で、厚さ約0.6cm、復原径は約17.5cmである。側面には、側板を固定するための目釘穴が1個ある。片面は刀物痕が明瞭に残り、もう片面は一端をケズり取って薄くしている。

(2) 長岡京期以前の遺物

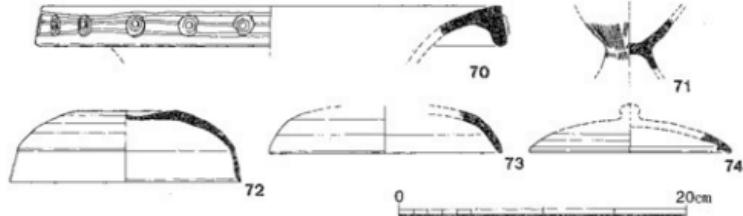
第36図 木製品実測図 (1/4)

長岡京期以前の遺構としては、4条の自然流路を発掘しているが、いずれも出土遺物に乏しく、弥生上器の破片が少量あるにすぎない。また、遺物包含層や長岡京期の溝S D24901からも、古墳時代の須恵器や埴輪が若干出土している。

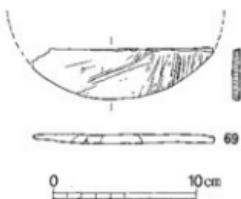
弥生土器 70・71は、ともに流路S D24905から出土している。70は、口縁の端部を下方に拡張させた広口壺で、拡張部には3条の擬凹線文を巡らせ、その上から竹箸で施した円形浮文を貼り付けている。内面はヨコナデし、外面はナデ調整の後、ヘラミガキを加えて仕上げている。胎土には、長石や角閃石を多量に含み、茶褐色を呈することから生駒山西麓産であると思われる。弥生時代後期(畿内第V様式)前半に属する。71は、台付鉢の破片である。外面は、ナデの後ヘラミガキを加えて調整し、底部内面はハケメを施した上からナデで仕上げている。この土器も、後期に比定されるであろう。

須恵器 須恵器には、古墳時代のものと、歴史時代のものがある。72と73は、遺物包含層から出土した环蓋である。72は天井部と口縁部との境に稜を有し、口縁端部は内傾して面をもつ。天井部は平坦で、ロクロケズリして仕上げている。73は器高が低く、口縁端部を丸くおさめている。前者は6世紀前半、後者は6世紀後半に比定できる。74は溝S D24901から出土した环Bの蓋で、口縁部内面に身受けのかえりを有する。天井部は扁平で、ロクロケズリにより調整している。7世紀後半頃のものであろう。この他、図示していないが、溝S D24901から他の体部片が出土している。

埴輪 円筒埴輪の小片が遺物包含層および溝S D24901から数点出土しているが、図示できるものはない。



第37図 長岡京期以前の土器実測図 (1/4)

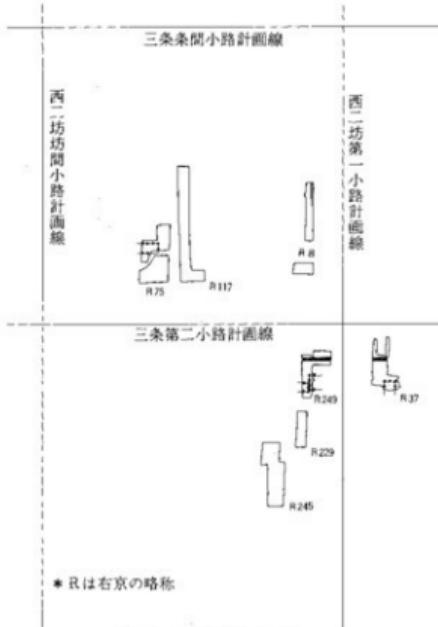


5 ま と め

今回の調査においては、当初予想したごとく長岡京の条坊と宅地に関する遺構が検出されるとともに、その下層でも弥生時代とみられる自然流路の存在を確認するなど、大きな成果を得ることができた。ここでは、これまでに集積されている発掘調査の知見を考慮しながら、若干の検討を加えておきたい。

条坊と宅地 今回検出した東西溝S D 24901が三条第二小路の南側溝になるであろうこと⁽⁵⁾は先に述べたが、この三条第二小路に関しては、左京第2次調査、右京第37次調査、同第83次⁽⁶⁾調査の過去3回におよぶ調査例が知られている。左京第2次調査は、左京三条二坊四・五町にまたがる調査で、南北両側溝とみられる2条の東西溝が検出された。北側溝S D 65は一部が確認されたにすぎないが、南側溝S D 66は約50m離れた2地点で確認されている。前者では幅1.2m、後者が幅2.2~2.4mを測り、溝心々間距離約6.1mという小路の規模が明らかにされた。右京第37次調査は、本調査地の東隣りにあたる右京三条二坊四町における調査で、南側溝S D 3703とそれに面する四町内の建物遺構が検出された。S D 3703は、幅1.2~1.3mほどあり、溝底に足跡がみられることなど、今回のS D 24901と規模や状況が極めて近似している。右京第83次調査では、西三坊大路との交差点付近で南北両側溝が確認されている。

北側溝S D 8355は幅0.8~1mあり、約24mの範囲で検出されているが、南側溝S D 8365は幅0.6mほどしかなく、しかも途中で途切れることなど遺存状況が不良で、溝心々間距離約5.8mと左京第2次調査での規模よりもやや狭く報告されている。このように、今回を含めて4地点で確認されている三条第二小路の概要をまとめると、小路の国土方眼に対する振れは、西端の右京第83次調査地と東端の左京第2次調査地との間で、北側溝が $0'4'53''$ 、南側溝が $0'5'21''$ ほど東で南に振れることが知られる。そうすると、両地点の間に位置するS D 3703およびS D 24901は、南側溝推定線よりも南へ2.5m前後ず



第38図 条坊遺構概念図

れることになり、従って少なくとも南側溝の場合は一直線に施行されなかったことを示すものであろう。側溝の規模については、調査地点ごとでそれぞれ異なり、一様ではないものの、北側溝が南側溝よりも広い状況がみとめられる。このように、側溝の規模が東と西あるいは南と北で異なる条坊路は、三条第二小路の他に、南一条条間小路、三条大路、四条第二小路、五条大路、西一坊大路、東二坊大路などで知られており、東西路では北側溝が、南北路では西側溝が広い場合の多いことを指摘できる。また、路面幅は側溝心々間距離で5.8~6.1mを測り、従前の調査により判明している長岡京の小路（9m前後の規模が多い）のうちでは、狭い方の部類に属している。なお、三条第二小路の条坊計画線は北側溝よりもさらに北方に位置しており、条坊計画線が路面心と一致する一町北の三条条間小路や南の三条大路とは異なる条坊割であったことが知られている。

次に、三条第二小路に面する五町の宅地においては、方位を違える2棟の掘立柱建物を検出した。いずれも小規模な建物と推定され、重複関係を有しているので、建て替えのあったことは明らかである。これらの建物は、五町の北東隅を占めるものであり、宅地利用の一端を知り得たにすぎないが、建物とともに検出されたS X24904を橋桁受けの礎石とすることが許されるならば、南側溝に橋が渡されていたことになり、宅地の出入口を知る上に有効な資料となろう。さらに、「殿」と記載された墨書土器がまとまって出土したことも、当地の性格を知る手がかりとして注目される。この殿という語句については、『続日本紀』などの文献史料や木簡、墨書土器などの諸例から、建物名称あるいは官司のなかに認められる。たとえば前者では、大極殿や大安殿をはじめ、寝殿、南殿、殿門など、宮域内に設けられた建物に多用されている他、大仏殿や志少領殿などといった寺院や地方官衙においても～殿と称される建物の存在が知られよう。一方、後者としては、縫殿寮（中務省）、主殿寮（宮内省）、それに主殿署（東宮坊）や殿司（後宮）などの官司にみられ、また殿司には尚殿や典殿という官職名、さらに主殿寮と主殿署には殿部や殿掃部と呼ばれた使部にも殿の字を見い出すことができる。ところで、墨書土器では、文書や木簡と異なり、省略して記載される場合が多いようで、その点を考慮すれば、「殿」の墨書土器は上記のいずれかの名称を省略したものと理解できないわけではない。とすれば、当所およびその付近に官衙もしくは～殿と称される立派な建物の存在を想定でき、加えて当所の西隣にある十二町において木簡や「衛門」と記す墨書土器が出土していることからも、その可能性は強いといえる。ただし、そうした推論を裏づける遺構は、これまでのところ未確認であり、今後資料の増加をまって慎重に判断を下したいと考える。

自然流路 次に、長岡京期の遺構面下で検出した流路について考えてみたい。今回確認した流路は総計4条あり、そのいずれもが自然地形の傾斜に沿った方向に流下し、乏しい出土遺物であったものの弥生時代後期に推定されることとは、先に述べたとおりである。なかでも、SD24905は比較的規模が大きく、複雑な堆積状況をみせる堆積土中に多量の流木を含み、しか

も側壁が急峻であることなど、水量と流れの速さがかなりのものであったことを窺い知ること(17)ができた。このような流路の確認は、周辺地域の右京第7次調査、同第50次調査、同第54次調(18)
 (19)、同第75次調査、同第117次調査、同第245次調査においてなされており、今里北ノ町遺跡と(20)命名され、旧景観を復原するにあたっての貴重な資料を提供している。そこで、これまでに判明(21)している流路群の特徴をまとめると、次のようになる。

- a 流路の方向は、おおむね西→東と北西→南東の2者があり、いずれも地形の傾斜に従って流下している。また、調査地点の異なる流路であっても、流れの方向や遺存地割などから、(22)
 一連の流路として復原し得る例がある。
- b 流路の規模については、最も広い幅15mから狭い幅1m前後に至るまで様々な流路があり、本流に相当するものや支流にあたるもののが錯綜している。
- c 流路内の堆積層をみると、砂礫やシルトが互層となって複雑に堆積し、流木を多量に含んでいる。このことは、水量が豊富なことに加えて、流れも相当速いことが知られる。
- d 上記のことから、流路の大半は自然に形成されたものとみられるが、護岸施設など人为が明らかに加えられている例もわずかにあり、人工的な開鑿による流路を含む可能性を想定できないわけではない。
- e 流路が機能していた時期は、出土遺物の内容からみて、弥生時代中期から後期にかけての時期に限られるようで、少なくとも長岡京期までには完全に埋没したといえる。

以上のような様相を呈する流路群は、現在の坂川、大正寺川、風呂川、小畠川などの中小河川の旧流路であったことは確実で、氾濫低地内を葉脈のごとく幾筋も流下していたものと推察される。従って、このような環境のところでは、居住域というよりは、むしろ水田地帯としての利用度が高かったに相違なく、右京第117次調査での花粉分析から導び出された成果においてイネ科が高出現率を示すことからも、窺い知ることができる。ちなみに、居住地域は、当所の西方に広がる今里遺跡を想定することに異論はないであろう。

注1) 白川成明、前田明美、田中智紀、井上礼子、渡辺美智代、倉橋裕之。

2) 岩崎誠「右京第37次（7 A N I N E 地区）調査概要」長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 1984年

3) 石材の鑑定に関しては、京都府山城郡土資料館の橋本清一氏にお願いした。橋本氏によれば、当調査出土の凝灰岩は、これまで長岡宮内より発見されている凝灰岩に比べ、硬質で様相が異なるとのことである。なお、同様の凝灰岩は、七ツ塚5号墳を巡る周塗から出土していることが、橋本氏の鑑定により判明した。従って、以下の報告書に花崗岩とあるのは誤りで、ここに訂正しておく。原秀樹他「長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 1986年

4) 瓦質焼成の須恵器は、二条大路北側溝S D 12026（左京第120次調査）から環Bの破片が1点

出土している。向日市教育委員会の秋山浩三氏より御教示を受けた。

- 5) 高橋美久二他「長岡京跡左京三条二坊第1次調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1975 1975年
- 6) 注1に同じ
- 7) 山口博他「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第9号 1984年
- 8) 長谷川達他「長岡京跡左京第118次調査」財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第15号 1985年
- 9) 注4に同じ
- 10) 宮原晋一他「長岡京跡左京第106次(7ANTB-3地区)発掘調査概報」向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第17集 1985年
- 11) 木村泰彦他「長岡京跡右京第96次(7ANKUT-4地区)調査概要」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 1984年
- 12) 山本輝雄他「長岡京跡右京第77次(7ANKSM地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 1982年
- 13) 小田桐淳他「長岡京跡左京第87次(7ANMTG-3地区)調査概要」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 1984年
- 14) 平城京の左京八条三坊十坪においても、同じ構造をもつ橋が確認されている。奈良県教育委員会『平城京左京八条三坊発掘調査概報』 1976年
- 15) 清木みき「墨書き土器『車牛』をめぐって」中山修一先生古稀記念事業会『長岡京古文化論叢』 1986年
- 16) 木村泰彦「右京第168次(7ANIFD地区)調査略報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センターワーク』昭和59年度 1985年
- 17) 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-2 1980年
- 18) 吉岡博之他「右京第50次(7ANIKC-2地区)調査概要」長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 1984年
- 19) 山本輝雄他「長岡京跡右京第53・54次(7ANIST-2・3地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 1982年
- 20) 山本輝雄「長岡京跡右京第75次(7ANIKC-3地区)調査概要」長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 1982年
- 21) 小田桐淳他「右京第117次(7ANISB-2地区)調査概報」財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センターワーク』昭和57年度 1983年
- 22) 長岡京連絡協議会での発表資料による。
- 23) 流路の復原については、かつて注18の文献において若干の検討を行ったことがある。
- 24) 注21の文献において、伊辻忠司氏の分析結果が掲載されている。

付表-5 满S D24901出土土器観察表

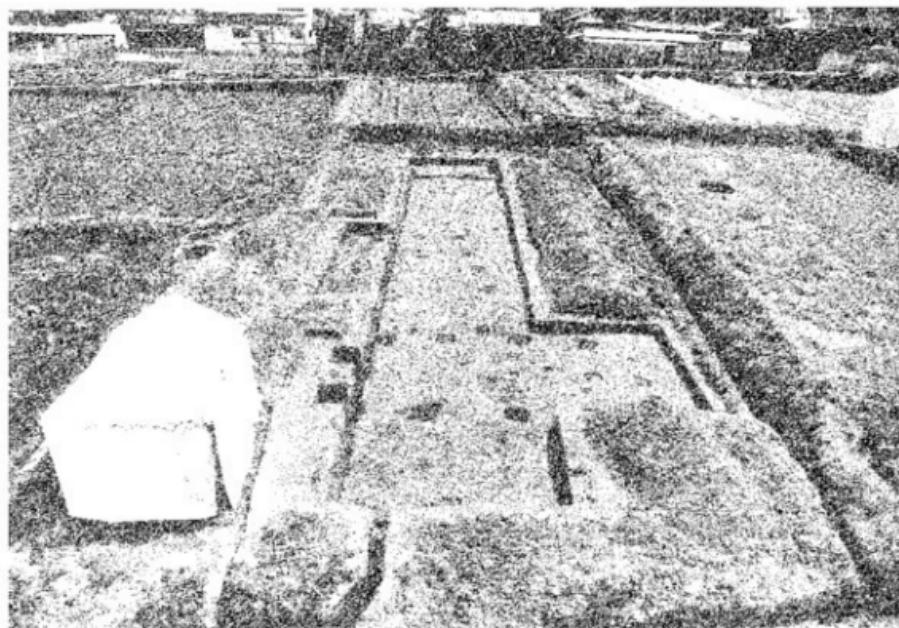
法量の単位はcm
器高の()は現存高を示す。

品種	法量 口径	器高	番号	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成・色調	残存度	備考
环	14.6	4.0	1	○平底の底面と、外上方に開く口縁部がある。 ○口縁部は、内側に巻き込み。	○外面は、底部から口縁部までハラケツリするe手法。 ○内面はヨコナデする。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/4	○底部外面に「殿」の墨書き有り
	15.4	3.6	2	○2・3は、口縁上部をヨコナデするため、やや外気味になる。	○外面は、底部から口縁部下平をハラケツリするe手法。 ○内面はヨコナデ調整。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡褐色	○底盤の一部欠	○底部外面に「殿」の墨書き有り
	16.8	4.3	3		○外面はe手法。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○やや軟 ○淡褐色	○1/4 強	
	16.8	3.3	4		○外面はb手法。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○橙色	○1/8	
土									
	18.4	4.9	5	○环Aの底面に、高台をついたもの。	○外面はe手法の後、ヘラミガキを加えて調整。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/6	
环 B 蓋	2.2	(1.6)	6	○盤平なつまみ。	○ナテ調整。	○赤色粒・雲母・長石・チャート・石英を多量に含む。	○良好 ○淡茶褐色	○つまみ 実形	
	15.8	2.6	7	○口縁部が内壁気味に立ち上がり、底部を内面に巻き込むもの(7・10)と、すなわち終るもの(8・9)がある。	○外面はe手法。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/4	
皿	15.0	2.5	8		○外面はb手法。	○長石・石英・赤色粒・チャートを含む。	○良好 ○橙色	○1/4 強	
	14.4	2.2	9		○外面はe手法。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/8 強	
	21.6	2.6	10		○外面はe手法。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/2 強	○底部外面に「殿」の墨書き有り
器	10.8	(4.0)	11	○口縁部が外上方に立ち上がり、环Aの形態に類似する。	○外面はe手法の後、ヘラミガキを密に施す。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○橙色	○1/4	
	12.0	(3.2)	12	○口縁部は内壁気味に立ち上がり、端部をわずかに折り曲げて突出させるものの(14)と、すなわち終るもの(12・13)がある。	○外面と口縁部外面をヨコナデし、他は未調整と思われる(e手法)。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/4	
	12.8	(3.2)	13		○外面の調整はc手法。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/4 強	
	14.0	(3.4)	14		○外面の調整はc手法。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○橙色	○1/6	○口縁端部に黒色物が付着する。
蓋 E	8.9	(4.0)	15	○底部上面がするどく内折して肩をなし、内頸気味の短い口縁部がつく。	○外面はハラケツリ。内面はヨコナデ。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○淡褐色	○1/8	
环 底径 A	15.7	(9.9)	16	○脚柱部からなだらかに移行する環部は、大きく外下方に開き、端部を下方に突出させる。 ○脚柱部は、7角形に面取りする。	○脚部は、粘土紐を巻き上げて形成するb手法。 ○脚柱部外面は、ハラケツリする。 ○環部は外面上に、6分割してヘラミガキを施す。	○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡褐色	○3/4	

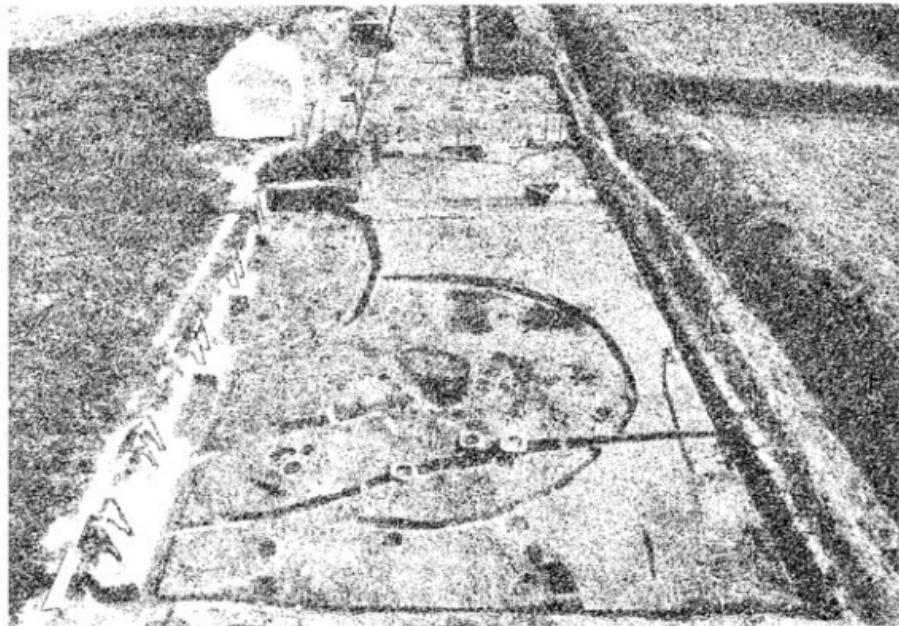
器種	器形	法 量	番号	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼成・色調	残存度	備 考
土 甕	口徑 器高								
	17.6 (3.2)	17		○口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反し、肩部に明顯な棱線を有する。 ○口縁前面は、内面に巻き込むもの(17)や、上方にわずかに突出させ、端面に沈線を施すもの(18-19)がある。	○外底の開割は、部位のハケメを施した後、口縁部を強くヨコナデし、体部は部位のハケメを加える。 ○内面は、口縁部に横位のハケメを施す。仔部はナデ調整をする。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○淡橙褐色	○1/4	
	15.6 (6.3)	18				○長石・石英・赤色粒を含む。	○魚好 ○淡黃褐色	○1/4	○外面に煤付着。
甕 A	16.0 (14.9)	19				○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○内淡茶褐色 ○外淡褐褐色	○1/5	○内外面とも煤付着。
	20.7 (4.0)	20		○口縁部は外上方に大きく開き、端部をわずかに肥厚させる。	○口縁部外端と内面をナデ調整、体部外端は部位のハケメを施す。	○長石・チャート・石英・赤色粒を多量に含む。	○良好 ○淡黃赤色	○1/12	
	30.0 (11.2)	21		○口縁部は「く」の字状にするほど外反し、端部を上方に突出させ。	○体部外端に部位のハケメを施す以外は、丁寧にヨコナデして仕上げる。	○長石・石英・雲母の大形粒を多量に含む。	○良好 (硬質) ○淡茶褐色	○1/4	
甕 B	26.4 (16.2)	22		○口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反し、肩部に棱線を有する。 ○端部は、内面に巻き込む。		○長石・石英・赤色粒・雲母を含む。	○良好 ○淡橙色	○1/16	
	10.9 3.4	27		○口縁部は外上方に立ち上がり、底部は平坦であるが、やや丸味を帯びている。	○口縁部外端と内面はクロロナデし、底部外端はヘラ切りの後、粗くナデで仕上げる。	○密。	○良好 ○明灰色	○1/8	○火拂の痕跡有り。
	12.1 (3.8)	28				○長石・チャート・石英を含む。	○良好 ○白灰白色	○1/3	
甕 A	13.4 3.6	29				○長石・チャート・石英を含む。	○良好 ○灰白色	○4/5	○底部外面に「跋」の墨書き有り。 ○火拂の痕跡有り。
	16.5 (2.9)	30		○口縁部は外上方に大きく開き、平坦な底盤をもつ。 ○器高が低く、直人に類似する。		○長石を含む。 ○チャート・長石・石英を多量に含む。	○やや軟 ○白灰白色 ○良好 ○灰白色	○1/5 ○1/2弱	
	17.2 3.7	31							
甕 B	17.8 (5.3)	23		○外上方にのびる口縁部と、平坦な底盤となり、底盤部に断面台形の高台を有する。 ○高台の端面は、平坦なもの(24-25)と、内傾するもの(23-26)がある。	○内面および口縁部外端をクロロナデし、底盤部はヘラ切りの後、粗いナデを施す。 ○高台は貼り付けによる。	○長石の微粒子多量に含む。	○良好 ○内・青灰色 ○外・灰褐色	○1/3	
	16.7 5.9	24				○長石・石英・黒色粒子を含む。	○良好 ○内・青灰色 ○外・灰褐色	○1/2弱	○底部外面に重ね焼きの接跡有り。
	16.1 (5.0)	25				○チャート・長石・石英を含む。	○やや軟 ○灰白色	○1/2強	
甕 B	9.6 (2.5)	26				○長石・チャートを含む。	○良好 ○淡灰色	○1/4	
	16.4 (6.9)	32		○比較的に平坦な天井部に、つまみを貼り付けたもの。	○内面および口縁部外端をクロロナデし、天井部はヘラ切りの後、ナデを加えて仕上げる。	○長石・チャート・石英の微粒子を含む。	○良好 ○灰色	○1/4	
	17.1 (1.9)	33		○口縁端部が、后曲するA形態のもの(32-34・36)と、亂曲しないB形態(35)がある。 ○つまみは扁平。		○長石・チャートを含む。	○やや軟 ○白灰白色	○1/8	
甕 B	14.0 (1.8)	34				○長石・チャート・石英を含む。	○良好 ○内淡茶褐色 ○外灰白色	○1/6	
	13.4 (2.6)	35				○長石・チャート・石英・黒色粒子を含む。	○良好 ○灰色	○1/20	
	12.8 (1.5)	36				○長石を含む。	○良好 ○青灰白色	○1/10	

器種	器形	法 星印 番号	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土	焼成・色調	残 存 度	備 考
	口棒	器高						
皿 B		29.3 (5.1) 37	○外上方に大きく開く口縁部と、平坦な底部に高台を有する。	○内外面ともロクロナデ。○高台は貼り付けによる。	○チャート・長石・石英・黑色粒を多量に含む。	○灰質 ○灰白色	○1/12	
盤		29.1 (2.1) 38	○口縁端部を内外に肥厚させる。	○内外面ともロクロナデ。	○長石・チャート・石英・黑色粒を含む。	○良好 ○暗灰色	○1/20	
高 環		(10.8) 39	○柱状の脚部や、上端に1条、中央に2条の次極を施す。	○内外面ともロクロナデ。	○長石・石英を含む。	○瓦質 ○表面墨緑色 ○断面白黄色	○脚部はほぼ完形。	○瓦器のような焼成を受けている。
皿								
蓋 M		4.7 (3.4) 40	○底盤の底部に高台を有する。 ○体部は球形に近くなるものと思われる。	○底盤の底部に高台を有する。 ○内外面ともロクロナデし、高台は貼り付けによる。	○長石・チャート・石英・黑色粒を含む。	○良好 ○灰白色	○1/2	
蓋 L		13.3 (2.4) 41	○大きく開く口縁部をもち、端部を上方に突出させる。	○内外面ともロクロナデ。	○チャート・石英・長石・黑色粒を含む。	○良好 ○内・暗灰色 ○外・淡灰色	○1/6	○内面に自然釉付着。
器 蓋		22.8 (9.5) 42	○口縁部が大きく開き、端部の形態には上下に抵張させるもの(42・43)、わずかに内方に肥厚させるが水平面をもつもの(44)、下方に起張させるもの(45)がある。	○口縁部内外面をロクロナデ調整する。	○長石・石英・チャートを含む。	○良好 ○内・緑灰色 ○外・紫灰色	○1/6	○内面に自然釉付着。
		21.4 (6.6) 43			○長石・石英・チャートを含む。	○良好 ○内・暗灰色 ○外・灰色	○1/8	
		19.2 (5.8) 44			○長石・石英・チャートを含む。	○良好 ○表面墨緑色 ○断面灰褐色	○1/10	
		18.6 (3.5) 45			○長石・石英・チャートを含む。	○良好 ○表面白色 ○外淡墨灰色	○1/10	
		12.9 (11.5) 46	○平坦な底部と、上方に開く体部からなる。	○体部外面は、平行タタキの後ナデを加え、内面はロクロナデ。	○長石・チャート・石英・黑色粒を含む。	○良好 ○暗青灰色	○底盤は完形。	○内面に自然釉付着。
黒 色 土 器 A								
		15.2 (4.0) 62	○内壁気味に立ち上がる口縁部をもち、端部を内側へわざかに巻き込む。	○外面は、ヘラケズリを施した後、ヘラミガキを密に加えて仕上げる。 ○内面は、ヨコナナの後、丁寧にヘラミガキを施し、さらに螺旋状の暗文を加えて施錠する。	○長石・石英・赤色粒を含む。	○良好 ○内・黑色 ○外・褐色	○1/8	
製 塙 土 器								
		15.4 (5.3) 63	○口縁部は、ほぼ上方に立ち上る。	○内外面とも粗くナデる。	○チャート・石英などの大型粒を多量に含む。	○良好 ○淡墨緑色	○1/20	
		11.2 (4.6) 64	○口縁部は外反気味に開く。		○チャート・長石・石英を含む。	○良好 ○内・墨茶色 ○外・墨黄色	○1/8	
		(2.7) 65	○口縁端部が内傾する。		○植物を混和材として含む。	○良好 ○内・暗褐色 ○外・黄褐色		

図 版



1 拡張前の調査地全景（北から）



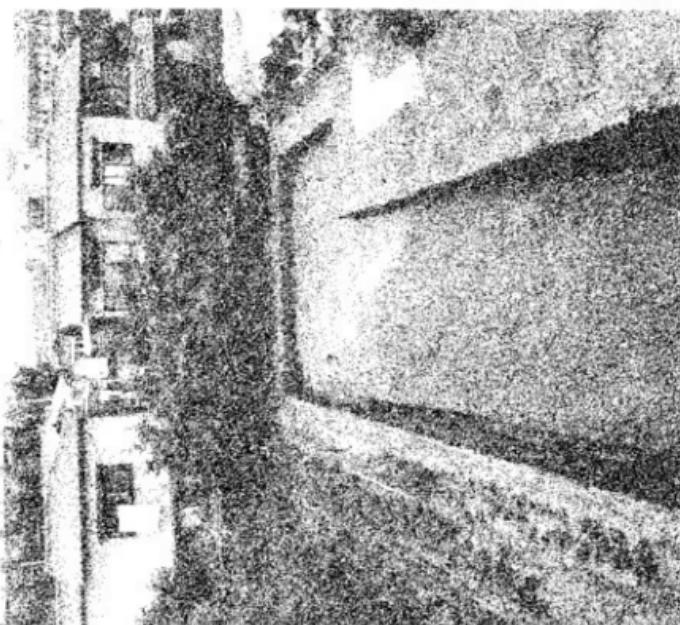
2 調査地全景（北から）



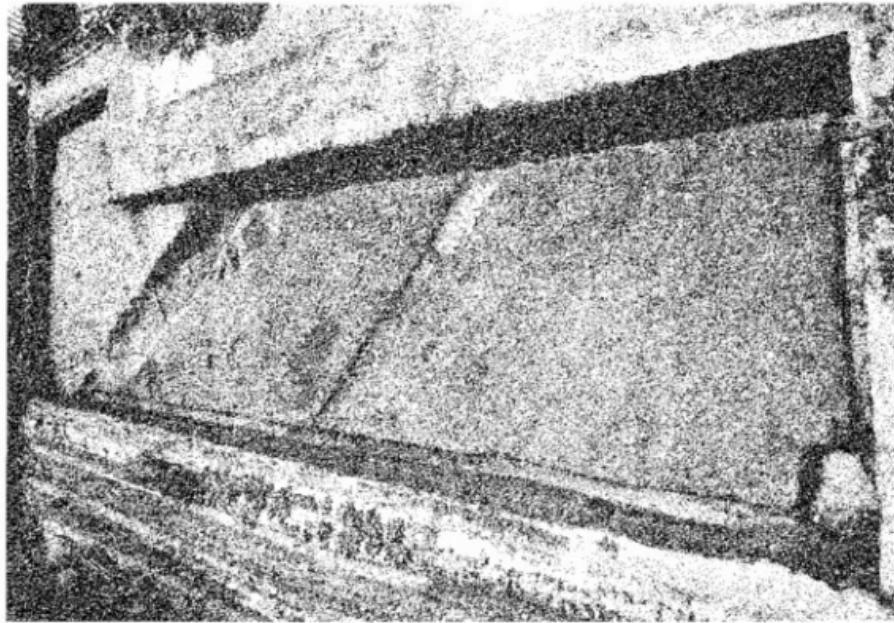
1 掘立柱建物 SB 22802・SB 22806（北から）



2 掘立柱建物 SB 22803（北から）



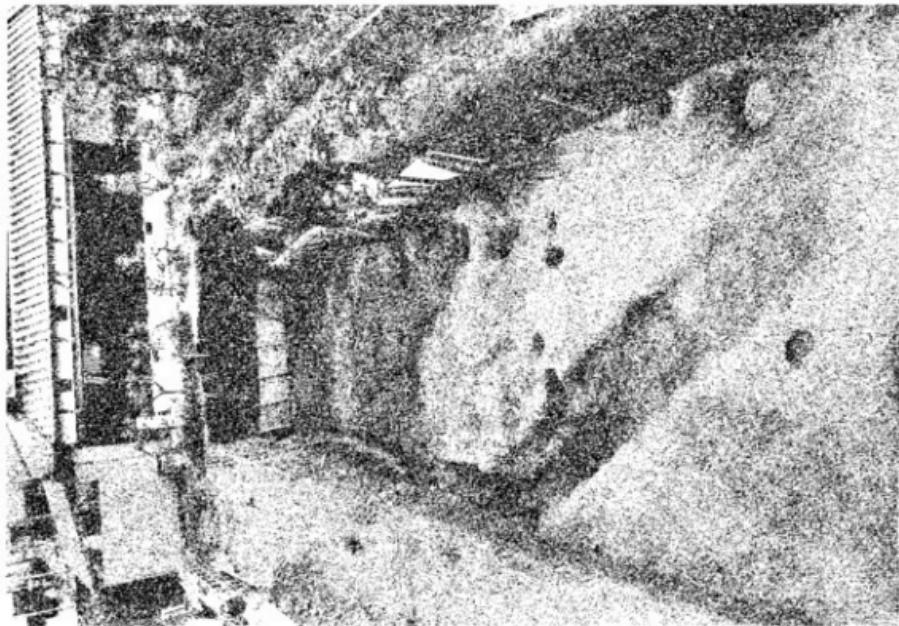
1 Bドレッチ 第2段上面桟出道路（南から）



2 Bドレッチ 第1段上面桟出道路（南から）



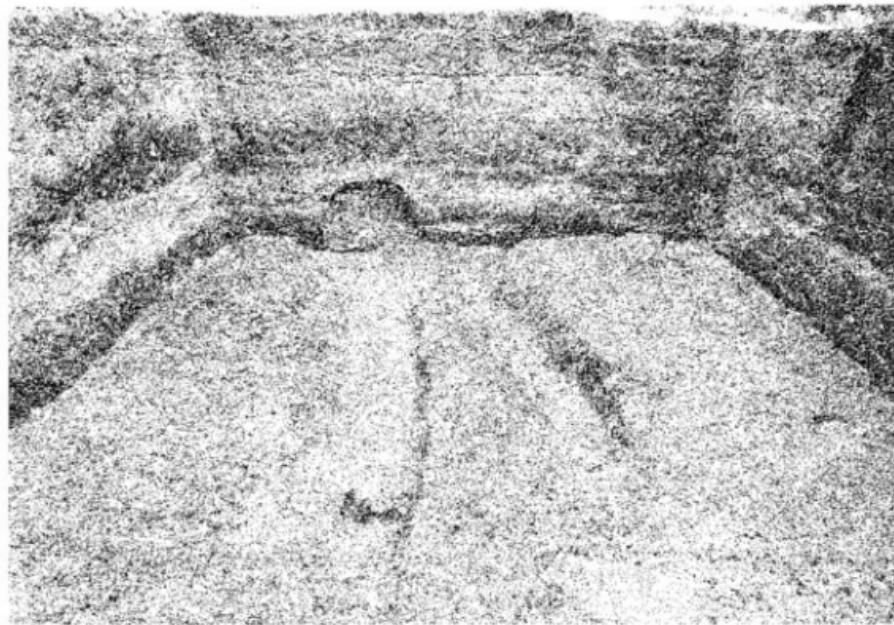
1 ブルーハチ 掘の土塁上直接の御城(左から)



2 ブルーハチ 掘の土塁上直接の御城(左から)



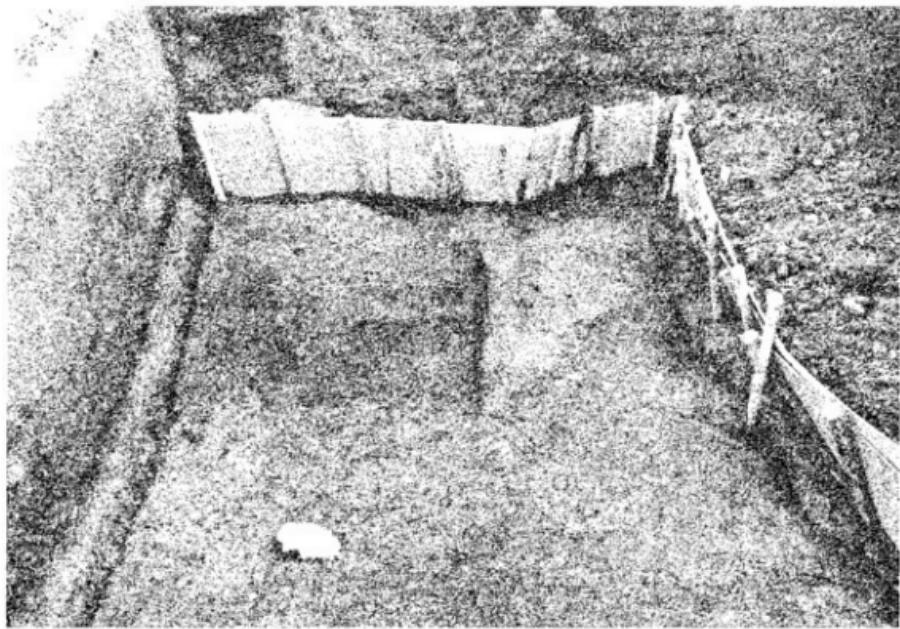
1 Bトレンチ 第6層下層上面検出遺構（北から）



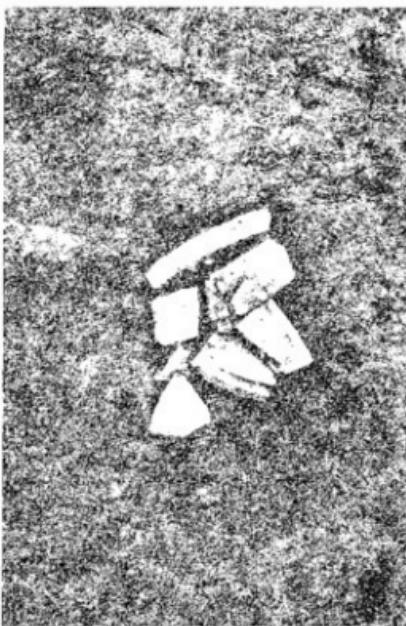
2 Bトレンチ 第6層下層上面検出遺構（北から）



1 Bトレンチ 地山上面検出遺構（北から）



2 Bトレンチ 地山上面検出遺構（南部、北から）





1 土壌SK 232/2 (西から)



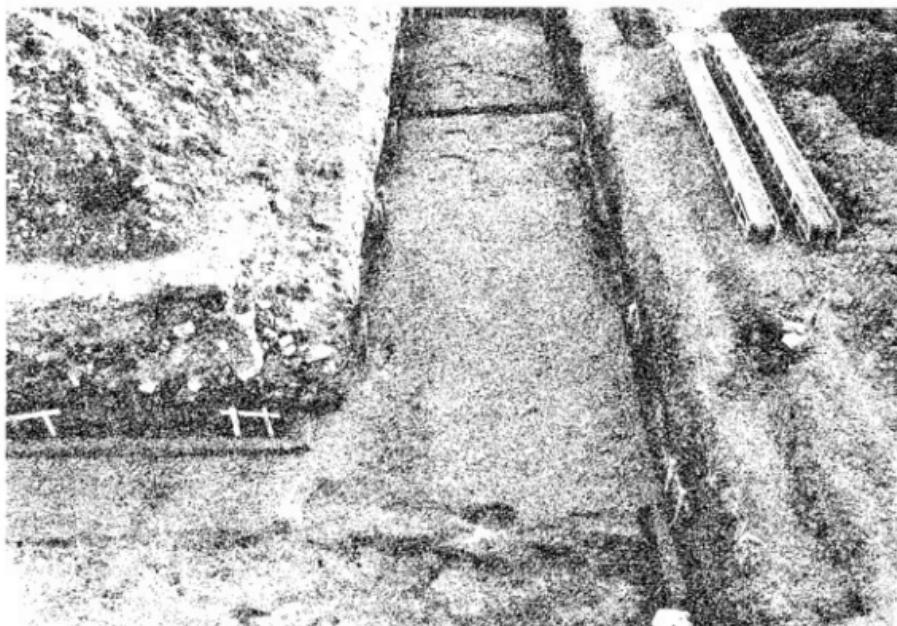
2 土壌SK 232/2(南から)



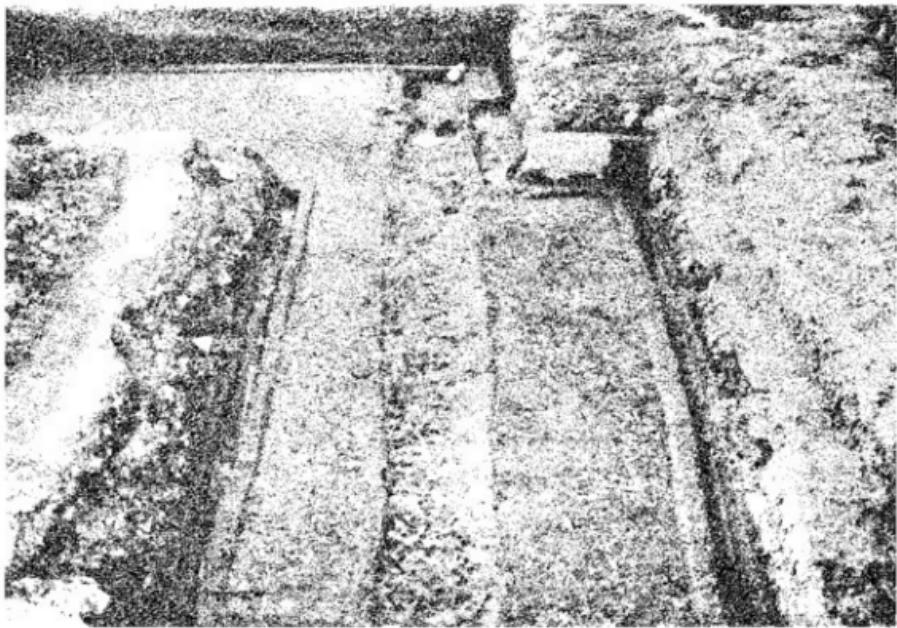
3 土壌P 13 (西から)



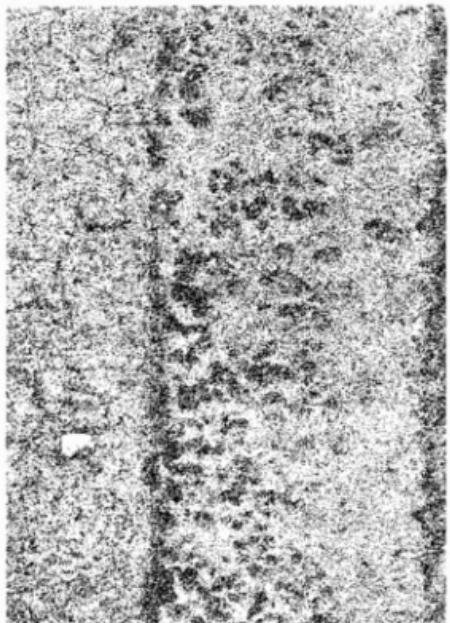
4 土壌P 14 (南から)



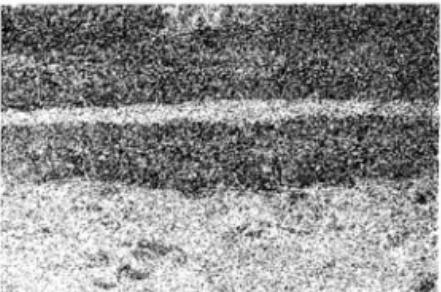
1 上層遺構全景（北から）



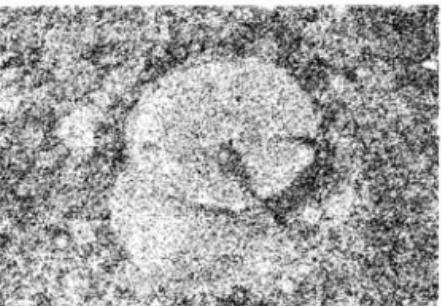
2 上層遺構全景（東から）



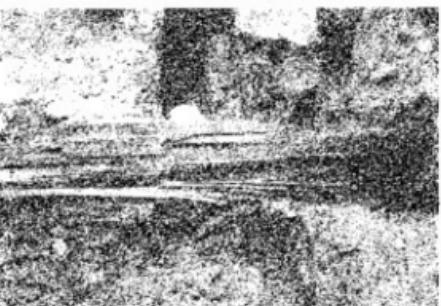
1 溝SD 24901（東から）

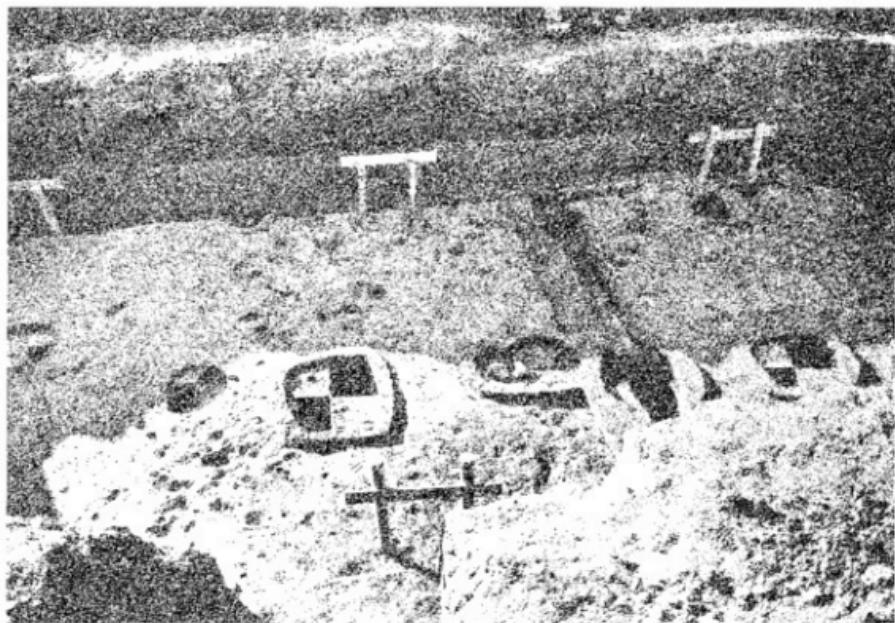


2 溝SD 24901の土層（上=東端、下=西端）

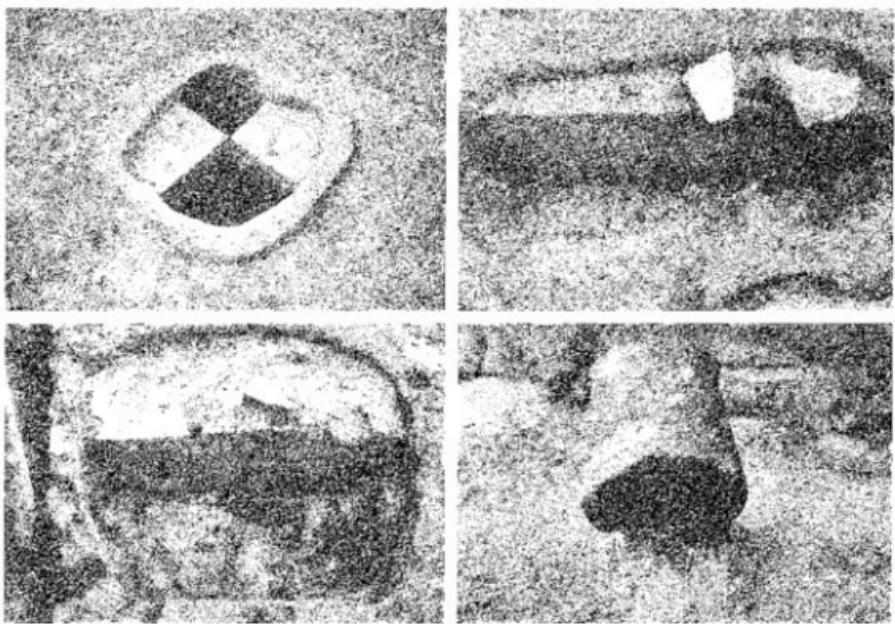


3 溝SD 24901遺物出土状況





1 挖立柱建物 SB 24902・SB 24903（東から）



2 挖立柱建物の柱掘形 (右上=P 5、右下=P 13 左上=P 10、左下=P 3)



1 下層遺構全景（北から）



2 下層遺構全景（南から）



1 流路 SD 24905・SD 24907・SD 24908（東から）



2 流路 SD 24905土岸堆積状況（北から）



3 流路 SD 24905遺物出土状況（南から）



4 流路 SD 24906（南から）



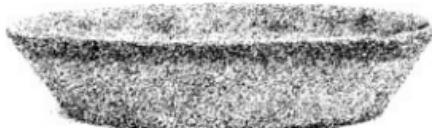
1



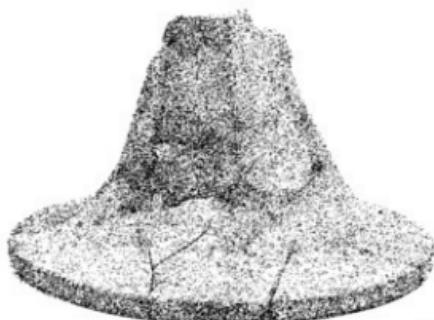
29



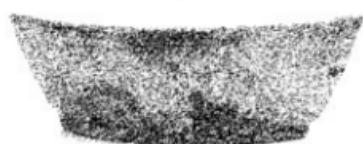
2



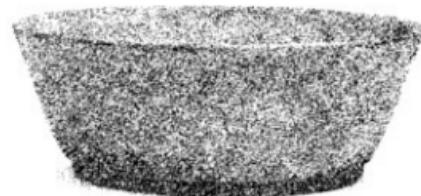
31



16



25



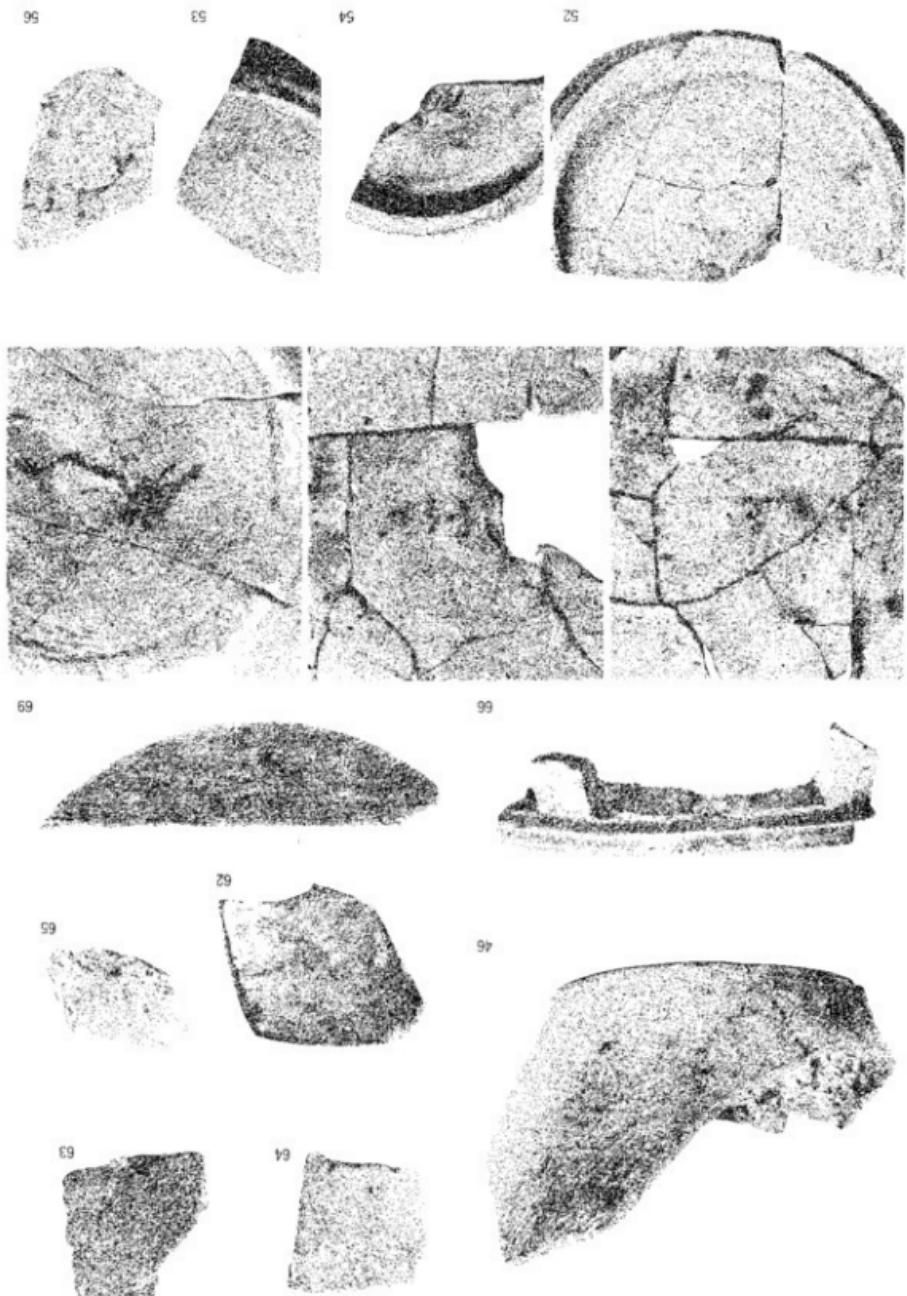
24



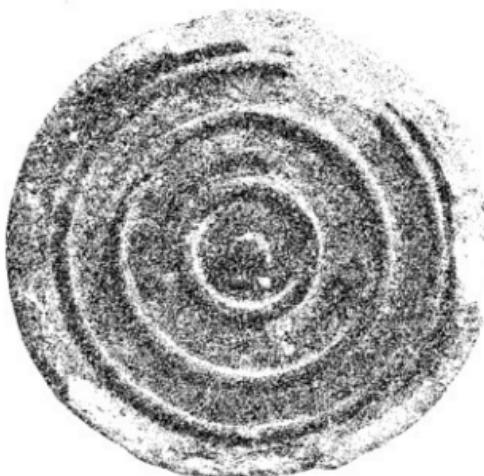
19



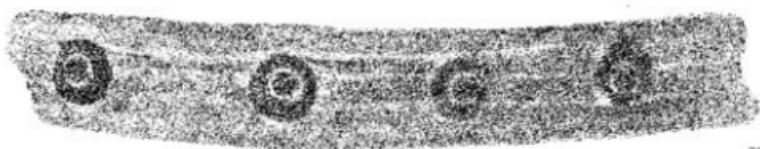
39



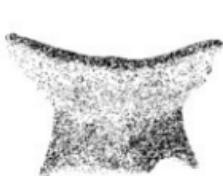
長沙馬王堆漢墓第249次發掘



68



70



71



73

長岡京市文化財調査報告書 第18冊

発行日 昭和62年3月31日

編集・発行 長岡京市教育委員会

〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121

印 刷 株式会社 同朋舎

〒600 京都市下京区中堂寺鍛冶町2

電話 075-361-9121